

農 業 本 論

日 本

二七〇〇〇〇〇町歩(水田)

本表は頗る完全なるものにして、これに加ふるに支那及び南北米國を以てせば、灌溉地の面積は莫大なるものならむも、未だ詳細の調査を得ず。

農業の創始と同時に灌溉の創始なりしと、換言すれば農は灌溉に發達せりとの説は、米國の人類學者モルガン氏が夙に辯明せし所にして、果して人間が熱帶國に興りしならんには、斯説は能く正鵠を得たるものなり。熱帶國に於ては今日も猶ほ稻作勿論其の他種々の植物栽培に就て盛に灌溉を施行し、温帶地方にても盛に之れを施行するは左に表示せしが如し、古人云はずや、河水潤九里、京師蒙福と。今倘し、支那の黄河若くは揚子江の兩岸千里に豁開せる沃野の全面を灌溉して、一旦水田となさば其の地文上の影響は抑も若何なるべきや。中古に在て伊太利及び西班牙に米作を創始せる際、空氣は次第に濕氣を催し來りて、有害の瓦斯は水田より發蒸し、熱病行はれて衛生に災害を及ぼし、若し荏苒此の状態に放棄せば遂には國難を招くべしと思慮し、市街地より若干哩を隔つるに非ずむば水田を開く能はずと令せしも、病厄尙ほ閉息せざりしかば、遂に市街地と水田との距離を一層遠からしめ、今

農 業 本 論

日伊太利に於ける米作地は僅に國の北部に遺存するのみ、水田開發の衛生的災害は未だ必ずしも以上の一原因に歸着すべからずと雖も、氣候の變遷を促すの事に至ては、一辭の異論なし、我國の空氣が外國に比ぶれば多量の水分を含みて、蒸蒸して霞となり、露して霧となり、漂ふて雲霧となり、滑溜して諸物を微するが如きは、水田稻作の盛に行はるゝに由ると蓋し少からざるべし。

灌溉に由りて生ずる地文的現象は、此の他又た河流の方向河岸の有様及び河の水量に影響す、溝渠を鑿開し水流を疏して以て灌溉に使せば、自ら河の水量を減耗し、従て流勢を弱め、其の流るゝ方向も亦自ら變化することあるべし、若し水量を減ずる時は自ら兩岸の積を顯はし、河水淺きを致し、舟筏運輸を害し、延いて諸般の事柄に間接の影響を呈するものなり。例へばオクサス河がカスピヤン海に流入せざるに至りしは灌溉の爲めに水量を減損せられたるに由るが如し。

今科學的調査に徴して考ふるに、年々ナイル河は漲溢して兩岸の地に沈澱を遺す該沈澱層の厚さは毎一年の割合極めて僅少なれども、百年には正に二寸五分の厚さに達し、千年を經過せば即二尺五寸の土層を形成すべし、假に埃及建國の當初よ

り歷程せる年数を五千年と概算せば、同國の地盤の高まりしとは實に一丈二尺五寸たるべし。又河底の高まるとも之れに准じて推知せらるべし。近來農耕術日進月將するに伴ふて、水中に含有する肥料分を沈澱せしむる方法、次第に行けるれば此沈澱の層も次第に増加するに至るべし。佛國地學の大家レクルー氏曰く、沈澱法の研究漸次緻密となるに隨ひ、萬千の歲月を重ねれば、ナイル河の一大水系も盡く灌溉に利用せられ、沈澱層の形成に漸消せられて、地中海に注ぐ頃は全く涸れて、渚野溝にだも若かざるに至るべしと。而して此の言今や漸やく事實となりて吾人の耳朶に達す、農の地文に及ぼす影響甚だ偉大なるものなりと謂ふべし。

植物の傳播

自然の化工、凡そ生ある者をして自ら其の類を繁殖し、其の好む所に運動し、各其の宜きに適はしむ、魚浮くに氣胞を以てし、鳥飛ぶに羽翼を以てす。植物の如き知覺運動の以て自ら其の好む所に遷移轉するの機能を具へざるものには、自然更に精工を設け、或は風の媒に由り、或は鳥蟲の媒に藉り、或は種子を自ら厚き包皮に護り、河流に信せて遠く異域に漂着せしむ、如是羽翼なくして而も能く飛び、脚なくして

農業の本論

而も能く走るもの、一に化工の深意湛然として精微、間なきを稱へざる能はざるなり。此の餘猶ほ人類の手に藉りて各國に傳播したる植物、其の數亦僅少ならず。現に今日歐洲にて栽培する穀類は、大概亞細亞及び米國より移植したる者にして、本來歐洲の地に生育せし者は實に僅々幾種に過ぎりし、ドカンドール氏の研究に據れば、方今世界に生息する人類の生命を維ぐ主要なる穀類は、皆最初亞細亞に生育したる者なり。小麥は小亞細亞より、蕎麥は滿洲より、大麥は亞細亞の西部より、米は印度より、豆類亦亞細亞より四方に傳播したるものなり。如此く其の初め一邑里に限られし者、今日に暨ひては遂に世界に傳播して到る處に蕃衍す而して此の傳播に費したる歲月は實に幾千百年を出で、夏の日影の如く、遅々延滞して辛うして天下に普及したるなり。然るに近來は植物學及び化學の熾に講究せらるゝに伴ひ、傳播の方も亦容易となれり、之れを實例に徴するに、馬鈴薯は四百年前には殆ど之れを知る者なく、三百年前には毒物なりとて食用せし人は稀なりし、喫煙も亦三百年來用ひ始めし者にして、玉蜀黍は方今こそ常食とする國民もあるなれ、米國の發見迄は其の名さへ知る者なかりしなり。古代埃及に玉蜀黍を耕作せりとは未だ判然な

論 本 業 農

らず)現今珈琲の名産を以て著名なるパタゴヤ島も十八世紀に至りて初めて珈琲を移植し、マレーチニーク島の珈琲も其の起原を尋ねれば嘗て一旅客が一粒の實を植たるに由り、新西班牙の小麥は現今各國に輸出すれども其の初めはコルテゾの奴隸が僅に三粒の種子を播きたるに在りと云ふ。佛國の桑も今を去ると四百年前に初めてアラモンテリマーの村に試植したるに證據して、當時試植の桑樹は今も猶ほ現存すと傳ふ。今日歐洲の砂糖の殆ど唯一なる原料とも謂ふ可き甜菜も百年前には未だ此より砂糖を製する事には思ひ到らざりし。近き例を取れば我國の甘蔗は慶長の頃始めて渡來したるものにて、僅か三百年の間に殆ど全國に行き渡り、又近頃歐米より輸入したる果樹或は蔬菜の我國各地に播布したるは實に驚くべき程なり。是の如く今日各國にて栽植する植物は多く人為を以て傳播したるものにして、農家の手を経ず自ら發育蕃衍して、一國の物産となりし者はあらざるべし。但し土地及び氣候等によりて移植し難き者もあるべし。例へば宇治茶の如きは宇治附近の山野氣候等をも移さざるべからざるを以て、羨むべき名産の茗茶も移植し能はざる所あるべし。獨逸ヨハネスベルヒの葡萄、希臘の「カレンツ」の如きも亦天

論 本 業 農

然の特産物たるものにして、他處に於ては恐らく人為の栽培を以て之れと比敵するものを收穫し能はざるべし。然るに近來學理の應用に由て従來到底移植の望みなかりし種類も、人工的に耕作し、各國皆自國の氣候及地味に恰好なる性質を發達せしめて之れが栽培を努むるに至れり。英國の有名なるキウの植物園に於ては、世界各國の植物を蒐集して、之れを自國固有の植物たる状態に適應せしめ、其の成功見るべきものあり。佛蘭西の移植園(此園の事業は猶ほキウ植物園の如し)にもて政府より年々巨萬の金圓を費して世界の諸國より新種を仰ぎ、米國華盛頓府に於ける農務省附屬の植物園の如きも盛に此を勉め、其の他同國の財産家が各自娛樂の爲に開設せる植物園亦鮮なからず。何れの國にありても富強の聞ある者は、皆此の種の試植園を設けざるはなし。移植に關しては項を改めて談説すべければ、茲には培養の有様、生長の模様、の差違に由り其の性にも多少の變化を生ずる事を知れば足れり。一利一害、植物の移植と状態の適應の盛に行はるゝに隨ひ、種々の害草も亦諸方に傳播蔓延するものにして、或は輸入穀類の中に混じり、或は諸種の媒介を得て蔓り、所

謂害草、草木の有害、有益に就きては其の見解未だ一定せずと稱する者は、異なりたる土地にて異なりたる境遇に繁茂蕃衍する事は、遂に栽培耕耨する植物に勝りて、殊に本國の驅除に苦みたる反比例的に、新開地等に於て得意に蔓延するものなり。此等は動植物學上趣味多き問題にして、既に其の原因に就きては學者の解説したる者少なからず、我國北海道にても近頃從來見ざりし害草の、生長するが如きも亦外國種の傳來なりといふ。

植物の傳播盛行すると共に、一方には從來の植物の消滅を見る事あり。例へばアルプス植物にして毎年採集せられたる結果、竟に其の種を絶ちたるものあり、其因蓋し此の山を通行する旅客の無數が長日、或は其の類を喜び、或は旅行の紀念の爲めに摘採したるに由ると云ふ、支那の或地方に於ては耕作の周約なるが爲め、一條の雜草だも假す所なく耕鋤せしが故に、今日は天然生の雜草は全く其迹を絶ち、埃及に、*パピラス*の消滅したるも亦人の知る所なり。如此く耕作の進歩に由て原來固有の植物の種類を盡す事あるなり。

植物は耕作者の媒介に藉り、以上の如く、其分布の區域に變更を生ずる事、明なり、而して植物の一たび其の生育の土を更むるあらば、從て性質に多少の變移を促すべきも亦明なり、動植物は地文學の一綱目に具はるを以て逐次之れに就きて説くべく、乃ち植物の變性を以て初めむ。

植物の變性

前項設ける所を以て見れば、現今吾人の栽培する植物は、元來其の生處を異にし、新しきは數十年古きは數千歳を経て、廣く各國に普及せし者なり。然るに植物にして一度原産地を變ずれば、其の性質に多少の變化を來すや疑ふ可らず、行徳の菜園より種子を十里以内に植移すれば、三年を出でずして、變性するを見て知るべし。淮南子に、江南の橘變じて江北の枳となると云ひ、又、諺に、處替れば品替るとは植物の狀態適應を表示せるものなり。古來農業の進歩を通覽するに、其の始め單一の耕作物も栽培の方、耕耘の術、沿革あるに伴ひ、漸く其の種類を増加し來れり、是れ蓋し種類の増加は植物の性質に變更を起すが爲めにして、之れを植物の變化 (Variation) と謂ふ。植物の種類は千八百三十六年の頃、フィリップ氏六萬一百内、地上に生長する者五萬九千種を數へたり、晚近ド、ガンドール氏は概算して十二萬乃至十四萬種と云

農業本論

ひ、サッカードー氏は十七萬五千七百種、ベンザム、及びフ、カー氏に據れば十七萬四千種、佛國のポードー氏の研究に據れば三十萬乃至四十萬種、又石川千代松氏は被子植物十萬已上、裸子植物二千六百已上、羊齒類三千四百已上、蕨類七千六百已上、藻類一萬已上、菌類四萬已上、合計十五萬三千六百種已上ありと云へり、進化新論是の如く植物の種類は未だ斯學の探究治ねからず、從て新發見の斷へず増加するにより確定すべからず、よし之れなしとするも一方農業の進歩と共に、變種交配雜種等の多きを加ふるや疑ふ可らず、然りと雖も、顧みれば農業の防發以來何萬歳を經過したるも、栽培したる植物の種類は極めて僅少なり、獨逸のローゼンタール博士曰く、或は食物に、或は藥料に、或は製造に、總て人間の需用に給せられたる植物種類は一萬二千種あれども、其の大多數は單に野生を採摘して收用したるものなりと、米國のスタルチワント博士は曰く、嘗て人間の食料となりし植物は千百九十九種の外、饑饉等の際喰ひ得べきもの約四千五百九十種ありと、現今栽培する種類は猶三百種以内にして、即ち食料、藥料、飼料、木材、染料、織緯、搾油、香料として其の他護謨、樹膠として、供用せらる。佐藤信淵翁が六部耕種に載せたる種

農業本論

類も亦僅少なりし、されば耕作物の種類は植物全群の十二萬と云へる最低數に比ぶるも、實に四百分の一に過ぎず、されども右十二萬種の中より最劣等の植物を除き去り、顯花植物のみの數と比べ見れば、概略十萬分の三百即ち三百三十三分の一に適當すべく、春圃秋庭の華、千紫萬紅の妍を涉獵して毎三百種に對し辛うじて、一種の用人に適する者を發見すべし割合なるべし。人類食料の大部分は禾本科に屬する穀類にしてスタルチワント博士が此の科中に屬する八十八種が栽培せらるゝとを説きしは、恐らく正鵠の言にあらざるべし、然れども若し之れを歴史上耕作されたる數となさば蓋し適當なるべし、教授グーアール氏は此の科中より二十種を擧げ、且つ其の重要なる者は六種に過ぎずと謂へり、即ち米麥の類是なり。斯の如く人類が植物界を涉獵して經營培養したる種類は甚だ僅少なり、言を換て之を言はば、自然界の植物多きも人工經營範圍内の有用なる植物は酷だ鮮なし、然れども人力の妙能く造化の工を凌駕し氣候異なれば從て培養の方を異にし、地味異なれば亦枯稿の患に迫るを護りて其の氣候に馴適せしめ、或は地味の不適當な

る處に生育せしむるが如き、總て人工的培養に由て其の形態、色素等に變化を生せしむるが如き、其の巧緻に驚嘆せざるべからざるものあり。

國にて耕作する米の種類は古は恐らく一種を出ざりしならむも、水稻の類今は我四百有餘、陸稻のみにて亦能く百餘種を算ふべし、カルカッタの博物館に陳列したる米の見本は實に千四百種を超ゆと云ふ。外國にて小麦の種類を増植したるは實に夥多にして、ポツペルスドルフの農業大學博物館に備付たる種類のみにて亦六百種に超過したり、米國にて玉蜀黍の種類を算へたるに亦六百種に超たりと云ふ。試みに種子商の種子目録を一覽せば、作物の變性が如何に盛に行はれ來りしやを察知するに餘りあらむ。佛蘭西のウヰルモラン氏は是に就きて左の變種の數を掲出せり。

- | | | | |
|-----|------|----|------|
| 馬鈴薯 | 四十餘種 | 葱頭 | 五十餘種 |
| 塘蒿 | 二十餘種 | 蕪菁 | 七十餘種 |
| 胡蘿蔔 | 三十餘種 | 甘藍 | 壹百餘種 |
| 萊菔 | 四十餘種 | 菜豆 | 壹百餘種 |

農 業 本 論

- | | |
|----|------|
| 甜菜 | 四十餘種 |
| 苜蓿 | 五十餘種 |

- | | |
|----|------|
| 豌豆 | 壹百餘種 |
|----|------|

本表は普通栽培する類のみを掲けたるものにして、決して現在諸國に耕種する總品種を載せたるにあらず、今二三の例を摘記すれば、燕麥の類は七十三、馬鈴薯の類は百六十以上、大麥百八十一、菓物の類も殆ど毎年新種を見ざるさく、特に苜蓿の如きは三百餘の類を繁殖せしむるに至れり。

作物の種類の新く増加せし原因は、氣候地味培養、食用法に緣りて起りし者の外、人類の需用に發せし者あり、均しく是れ苜蓿と稱するも、自ら酸甘の別を生すべく、生食、火食、用途違ふに由ても自ら異なる種類を選ばざるべからず、等しく火食に供するにも、炙くと煮るとの異なるに應じて給與を選ばざるべからず、其の他長く貯蓄するものと直に給用するものとも、自ら生育を異にせざるべからず、總て種々の用法に係り嗜好に應じて、自ら變性の新種類を見るに到る。始裁以來未だ百年を出ざる甜菜も今は數十の種類を算ふるに至れり、其の變種増加の因縁は亦苜蓿に於けるが如くにして、時には又た施政上の事實に關係することあり、例へば佛國及獨逸國

農 業 本 論

農業本論

にて甜菜の種類を異にするの因、蓋し獨逸國にては糖税を甜菜其の物に課するを以て、同國には甜菜を耕作するに糖分多量の品種を貴び、佛蘭西に於ては之れに反し精製糖に課税するが故に、甜菜を栽培するに當り糖分の多寡を問はずして偏へに根塊收穫量の多きを貴ぶが如し。

變性に就きて最も主要なる目的は恐らく收穫の多量なるものを精選するにあるべし例へば米の種類を選ぶにも多くは收穫の多量を主とするが如し、嘗て埼玉縣にて試作せし時、一粒の籾より三百すじを出せる者ありき、佛のウヰル氏曰く、純真なる化學肥料を用ゐれば砂土にても一反歩に三石の割合にて小麦を造作し得べしと、然るに實際の農業の收穫を観察すれば北米の小麦の産地に於ては一反歩に付僅に五斗五升乃至六斗を收め、英國に於て種類を精選し、耕作培養の方法を改良し、極力産額を増加せしめしに左表の如き結果を得たり。

年 號	一反歩收穫	増加の割合
一七七一一年	一石一斗五升	—
一八五〇年	一石三斗二升	一割五分二二

一八七八年

一石四斗

二割二分七

農業本論

佐藤信淵翁の垂統秘録に曰く、古來定法は一坪より五合づゝなるも、予が家の養法の如く彼の六部耕種法の説に従ふ時は、一坪の土地より米一升二三合より二升許りも生ずべしと、現今化學と植物學の力を藉り來らんには是れ亦た敢て難事にもあらざるべし。

殊に近來電氣學應用の進歩より考ふれば、今後植物の生長及性質の上に如何なる變動を來すや殆んど想像に餘あり、見よ米國及佛國に行はるゝ電氣畑の成績の頗る良好なる、嘗に學理上好結果を奏するのみならず、農家収益上多額の利潤を得るといふ、大氣中に在する電氣を用ゐて作物の生長を刺撃する時は、成長或は收穫を増すと五割なり、葡萄は顆粒に於ても重量に於ても又糖分及酒精分に於ても從來の者に較ぶれば遙かに超越なり、草花に電氣を施用すれば香氣愈高まり、色澤益々鮮麗を加ふ、又電流を地中の種子に應用するに其の發芽期若くは、成長期に當り之れを施さば其の速度を増すと實に驚くべきものありといふ。

電氣應用の進歩と共に温室寒室の構造も、大に改善を加へ、植物の要する温度のみ

ならず、光線の分量并に性質をも随意に酌量するを得るに至らば、植物の變性も如何なる程度に達すべきか、今人の想像の殆んど達せざる所にありと謂ふべし。

農業と動物

動物は知覺運動の自在なるを以て、或は氣候食物に影響せられて其住居を遷移變更する者なるは、彼の植物の一定處に生長枯稿する者と、全然異なることを知るべし。遷移變更の事實は彼の渡り鳥の期節を失はざるに見るも、漁戸が漁屬を網するに一定の季期あるに徴するも、亦昭然たるべし。且其の遷移運動するや實に人為造作の到底企及し能はざる精巧の機關を以てして去來自適するなり。

自然界の現象に因縁して誘起せらるゝ此等動物の遷移運動は正に人力の範圍外に屬するを以て、人為に疑りて此に影響を與ふるは頗る難事ならずや、言を換て之れを曰はゞ人為を以て一國の動物を淘汰變更するが如きは到底期望すべからざる難事ならずやと云ふ疑あり、然れども動物學の蘊奥を開發し、動物と其の境遇情勢との關係を穿索し、更に動物の生理及心理の研究歩武を進むるに由て、動物に對しても亦人為の影響を蒙らしむるに至るべし、是亦學者の助成を仰ぎて農家の持

農業本論

据經營すべき問題なりと知らる。

吾人に知られたる動物の種類は亦植物の種類の當初甚だ僅少の數と思惟せられしに同じ。嘗て釋尊入涅槃の際、愁傷罽吊の典に會同せし動物の數は、小は蜻蛉蜘蛛の屬より大は獅虎の類を該ね、迦陵頻伽を加へて尙ほ五十三種に過ぎりき。是を以て假に天竺の動物の全群と見做さば、吾人に認識せられたる動物の數は窮めて僅少なりしならずや、況や是を以て當時の世界に棲息したる動物の總種類と見做さむは恰も、鼈脊を指して雲間の月輪と稱するに異ならずや、三才圖繪を一覽するも當時の動物の種類は窮めて僅少なりしを推知するなり。今を距る五十二年前英吉利の某學者が計算表示せし所に依れば、地球に生活する動物の種類は十三萬八百十種あり、陸上に棲息する者十一萬五千五百、淡水に生活する者三千五百六十、鹹水に生活する者一萬一千七百五十なりと、然れとも今日の動物學者は昆蟲のみにても尙ほ十萬に超ゆべしと説き、二年前の統計に徴するに動物類は三十六萬六千の大數に達せりと稱し、石川千代松氏は脊索動物二萬五千已上、軟體動物二萬三千三百已上、節足動物三十九萬已上、蠕蟲動物六千已上、棘皮動物三千已上、腔腸動物四千已

農業本論

上、原生動物五千已上、合計四十五萬四千七百種已上ありとせり(進化新論)

ライデー氏の如きは此の大數も尙ほ未だ足らずと爲して千五百萬種は現に地球表面に棲息すべしと云へり。

是の如く幾十萬を以て計算すべき大數の中には蠢々たる么微の昆蟲を漏洩せざるべく、又哺乳動物の象、鯨をも該ねざるべく、即ち總て動物界に屬する一切の生物を網羅したる者と知るべし、就中哺乳類にして人類に最大必要なる者を精算せば、無慮二千五百と稱す、更に其の最も吾人と密着の關係を存して生活する者を擧ぐれば駱駝、猫、馬、牛、羊、犬、豚等僅々六七種に過ぎざるべし、ゼテガスト氏の計算に據るも亦僅に四十七種あるのみ、禽鳥の數一萬二千五百種あれども吾人が日常口に唱へ、目に睹る者は鶏、鶩、吐綬鶏及び鶯の數種類に過ぎず、此の餘好事家が或は小鳥を籠養し、或は諸獸を檻飼するも、家畜と稱すべき者は、以上極めて少數を以て其の概を羅致したるべし、此等十餘種の家畜も始めて發生せし土地を穿鑿せば、其の本國は、蓋し一二處に歸着すべし、即ち當初は極めて狹局なる一地方に發生したりしものなるべし、此家畜も年所を經、漸次四方に傳播増殖し今日に至り諸國普及せざる

論 本 業 農

なきに至りしは、實に飼育者の非常なる困難と忍耐とに由りし者にて、一匹の野獸、一羽の野禽を馴養するも決して容易ならざりしなり、况や之れを異なりたる氣候に適應せしめたるが如きは、困難も亦一層多大なりしを想はずむばあらざるなり、(動物馴養の起源に關しては農業發達史に譲るべし)

嘗て之を聞く、大動物は古來一度大抵人類に馴致せられしとありと、然り獅子の如き粹惡の屬も、虎の如き矯獷の類も、豹の如き慄悍の者も、昔人嘗て利用し戰陣に列ねて叱驅せしは、歴史上の事實にして、今日にても香具師と稱する一種の生業あり、獅虎犀象の類を馴致し觀覽の客を迎へて口を糊する者あるにあらざや、亞米利加の南部に於ては猿猴を馴養して棉の採摘に使用せりと云ふ、蛇の類も諸國にて馴養せらるゝにあらざや、是れに據て考ふるに動物學の發達及び動物心理學の進歩に伴ひ、恐るべき野獸も遂に本性を變更し矯剛なる家畜として馴養せらるゝに至るべきやも未だ知るべからず、又今日の熱帶國の動物も移して温帶國に生存し得べきに抵らば、亦温帶の動物群を増殖するにあらざや、近來亞米利加に於て蛇鳥を飼養して羽毛を取り、又馴鹿を移し來りて貨物運搬の用に供し、西藏の山羊、韃靼の

論 本 業 農

農業本論

「ヤツク」(駝牛の類)を佛國に移殖したるが如き、其他水牛を伊太利に移殖したるが如き、實際成效を得たり。猶ほ一層著名なる實例は、西班牙の「メリノ」羊種が現今世界に傳殖したるが如き、英國の短角牛が世界の各國にて食用せらるるが如き、亞刺比亞の駿馬は洋の洋はの内外を問はず、厩飼せらるるが如き、其他、濠洲に於て從來兎を見ざりしか、僅々數年前試験的に輸入し、今日既に其繁殖の大なるに呆然たるが如き、亞米利加にては從來雀を見ざりしに、英國より携へ來て放ちしより、今日にては米人は其驅逐の策を講ずるに至しが如きは、亦動物群の變動の大なるを示す者なり。蟲の種類の増殖も亦斯の如し、苹果樹を米國より輸入したる本邦には「エゾシロテウ」と稱する蝶類を繁殖し、柑橘類の苗木を、米國歐洲に輸入する本邦よりは「カヒガラムシ」を彼地に傳播せしむ。南京蟲の如きは支那人等と交通の結果本邦に入り來れるとは、喋々せずして、世人の知る所ならむ。皆に害蟲のみならず、現今にては有益蟲類を輸入して盛んに害蟲撲滅驅逐に従事せざるべからず、我國にても重要な家畜は古來固有の者、至つて僅少にして牛馬羊の三大家畜も恐らく輸入物なるべし。洋犬の如きも一たび我國に渡來せしより、未だ二三十年に過ぎざるに本邦固有の種類の殆ど絶無の有様に陥りしなり。

農業本論

是の如く動物群が人類の媒介に由て増殖の傾向あるは今後猶一層甚だしかるべく、且益人類の便宜を増加し來るは明白なるべし。現今の人類社會は若し家畜の全體を取り去られれば暫時でも存在に困難なるべし。されば英國實驗哲學大家ハッソン氏の言に「家畜は人類社會の一部となりたり」とは如何にも正鵠を獲たる名言と稱すべし。吾人は牛馬なく羊豚なき所の文明社會なる者を殆ど想像し能はざるなり。

農家の手に藉りて動物群が爾來群類の包容を擴むると共に、一方には又た減少の事實を誘起し來れるは數の免かるべからざる所なり。近く之れを北海道の新開地に徴するも、人煙時を追ふて増加し斧斤日に深林に入るや、熊狼の如き猛獸は愈よ岑嶺幽巖に逃竄して、其の跡を没し去りしを以ても知る可し。實に札幌の近郊の如きは二十年以前には、狼月夜に徘徊して、悽絶人の魂を驚破せしも、現今全く此の禍を聞かざるに至り、又た彼の北米の野牛(ブライフ)も同じく今は其の跡を絶ちぬ。之れを聞く野牛獵獲の激烈なりし當時は三年の間に、五百五十萬頭を打殺したることあり、又

論 本 業 農

當世期中頃には、毎年三四百萬頭の割合を以て捕殺せりと云ふ、以て其の撲滅の期の短小の歲月に起りしを知るべし、魯西亞國の獵戶は固より農家に至るまで又た、冬期の閑業として栗鼠を獵獲して、年々二百萬匹の皮を海外に輸出せしかば同國の栗鼠は遂に滅滅したりき、開拓使の頃までは北海道に於て、鹿群繁殖し居りしが、一時非常に濫獲したるの結果、殆んど全道の鹿を絶滅せむとするに至りしかば、當時官令を發し爾來終歲同道に於ける鹿獵禁止を令したるの結果、今日に及びては復び該獸群を爲して、山野を徘徊するを見るを得るに至れりと云ふ、北米合衆國にて「エルミン」(Ermine)を打殺する事亦年々數萬匹に超え、英吉利の兎を消費する事亦年々三百萬匹と稱す其他之れに類する實例を索めなは各國に多々存在すべし、中に就て最も甚しきは一種類全體を全滅せしむる事にして、狼の英吉利國にて二百年前に絶滅し了りしか如き、又佛國にては百餘年前之れを殆んど滅絶に歸せしめたりしが、革命爆發し兵馬倥傯農家亦耒耜を擲ちしかば、田疇隴畝荒蕪に歸し、狼亦山野に徘徊するに至れり、波蘭に於ても亦同じく、狼の増滅は毎に農業の盛衰と關係を有せしと云ふ、合衆國に於て南北戦争の際農事衰頽せしか爲め、森林に鹿の

増加を見しと聞く、是の如く論じ來れば農業の直接に間接に動物群に影響を及ぼす事實は固に明瞭なるべし。

動物の變性

種類を以て之れを算へなば、人類の用に供せらる動物は頗る僅少なりと雖も頭數を以て之れを計らば、其の數決して僅少にあらず、左に一表を掲げて方今文明諸國にて使用せらるゝ家畜頭數の概算を示さむ。

シモンツ氏の調査

州名	馬	驢及騾	牛	羊	豚	山羊
歐羅巴	2,000,000,000	500,000,000	1,000,000,000	2,000,000,000	500,000,000	3,000,000,000
亞細亞	1,000,000,000	100,000,000	500,000,000	1,000,000,000	200,000,000	1,000,000,000
亞弗利加	500,000,000	100,000,000	200,000,000	500,000,000	100,000,000	500,000,000
亞米利加	1,000,000,000	100,000,000	500,000,000	1,000,000,000	200,000,000	1,000,000,000
濠州	1,000,000,000	100,000,000	500,000,000	1,000,000,000	200,000,000	1,000,000,000

論 本 業 農

此の餘野蠻國に使役する動物の數も亦幾何なるべきや未だ詳ならず、蓋し牛馬羊豚の數は或は野獸の總數より超過する事なきか、固より野獸の統計は未だ其の法なきも、世界各國に於て獵戶が日夜捕獲打殺する野獸の總數は極めて夥しき者なるべし、要するに此等巨萬の有益なる家畜動物は何れも皆吾人々類と相待ちて生存し、吾人の手に藉りて生を此の世に得來り、吾人の手に藉りて日常の食物を給與せられ、其の死するも亦吾人の爲めなるが如き、亦ハリソン氏の言の意味深長なるを思はずむはあらざるなり、余は今一步を進めて主張すべき一言あり曰く、家畜は單に人類社會の一部分たるのみならず、吾人々類の精神界の一部を占むるに至れりと、是れ家畜は一面には勞役に服して吾人の勞作を裨補し、一面には友情を以て吾人を慰め、益密着の關係を馴致し來る、馬は騎者の意を諒として戰陣に馳驅し、又は貨車に羈がれて運搬の用に供せられ、或は畝を耕作して間々機敏なる事、農夫に倍蓰するとあり、牛亦然り、渠れ豈に單に草を給與し、乳と肉とを生産せしむるの機械ならむや、其の人類に役せられて温順なる情質や遅くとも重きを負ふて能

合 計	10,111,000	10,111,000	10,111,000	10,111,000	10,111,000
-----	------------	------------	------------	------------	------------

論 本 業 農

く千里の遠きに耐ゆるてふ特別の天稟は亦吾人の良友たるに適はずや、然り而して、吾人の家畜を飼養するや、各種別々なる目的を以てするが故に吾人の意志の異なるに應じて、家畜の種類も亦差等を生ずべきは自然の結果なるべし、是れ即ち家畜に變性多き理由にして、彼の犬を見るも車を牽かしむべき者あり、牧羊犬あり、夜を守らしむべき者あり、獵犬あり、房室に畜ふて小兒の友たらしむる者あり、或は北極廣漠の野、雪深く數尺なれば犬を使役して橇を牽かしめ、以て往來に便にすべし、アルプス横斷の行客風霜に苦しみ寒痺に感し、雪に惱みて路上に昏睡するや、巨契を使役して之れが救助に従事せしむる者あり、等しく畝獵の際に使喚する者にも亦自ら箇々分業ありて各種特別の技能を有せざるべからざるに由りて、茲に「セッター」「ポインター」其の他の大小差等を生し來り、其の種類は實に數十に達す、馬には軍馬農馬及び運搬用あり、等しく運搬用にも主として速力を要する種類と、主として重きを負荷するに堪ゆるを要する種類とあり、馬匹の種類も少なくとも三十以上は確かに存在すべし、牛には食肉種あり、搾乳種あり、等しく乳牛の中にも牛酪を製するに供せらるる者あり、乾酪を製するに供せらるる者等あり

て種類亦甚だ多し、是れ蓋し人類の飼養法に由て今日までに製造したる變性種にして、通常農家の飼牧する種類のみにては三十四五種は存在すべし、羊も亦肉を食ふが爲に飼養せらるゝ者あり、乳を搾取する爲に飼養せらるゝ者もあり、又毛を取りて毛布を製するに供用せらるゝ者もあり、て各國を通じなば數百の種類は存在すべし、豚は英吉利の農家の飼畜する者のみにて、已に二十四種を數ふべければ諸國にて飼畜する者を加算する時は實に數倍すべし、鶏は種類既に百を以て計算せらる他養鶏家は益新種の製造に鋭意孜孜たる者の如し。

今後生物學の發達に伴ひ、家畜の變性は益盛大となりて、亦益人為勢力の其の間に活動するを認知すべし、是れ自然の趨勢のみ、試に見よ、ハレ農科大學にては博士キエーソンの指揮の下に一掃の動物園を設けて萬國より家畜の種類を極力蒐集し、人為を以て羣尾交合せしめ、諸種の變性を造るに盡瘁して竟に馬にして鹿の如く、鹿にして馬の如き、牛にして角を闕如し、馬にして尾を闕如し、實に異様の變性物を生したるが如き、實に人為勢力も亦甚如すべからざるを知るべき也、ダルクウヰン氏嘗て現今の家畜は必ずしも同一種の祖より純粹に血統を傳へたる者にはあらず、諸

論 本 業 農

論 本 業 農

種の動物の交尾の結果より發生したる者なるべしと言へるは、流石十九世紀の碩學大家の説として傾聽するの價值十分なるべし、之れを以て想ふに將來生物學の進歩と共に今日猶ほ未だ夢にも知らざる變性物を生するに至るべきや、豫しめ期すべきなり、嘗て獨逸の博士ホルンか蛙の卵を接續合化し一種の動物を製造したりしが如きは亦天工の精妙を奪ふ者にして、近頃米國のクランプトン教授か蝶若しくは蛭の一部を相接續して一體と爲し新奇の動物を造る事を研究して學者に驚を喰はせし等の事實より推考するも、後には高等なる動物にも接續法を適用し得るに至るべきやも知るべからず、乃ち余が言の懸空ならざるを諒すべし。

新奇動物の變種製造は暫らく生物學者に任するも、該製造術をして精功を窮め造化の域に出入して、世用に供せられ、吾人に裨益あらしめむとするには、亦農學者の媒介馴致の勞に藉らざるべからず。

其形狀には變化なくとも、現在吾人の日常使役する牛馬の性質が實に著しく變更したるは明白なる事實なり、此の事實は輒近農業の進歩の偉大なるを示す者とす、試に見よ、英吉利にて、千八百三十七年の頃には三年乃至四年を経過せずんば、羊の

肉は食料に供し難かりしも、爾來二十年を經過して千八百五十七年の交には飼養法著しく發達したるを以て、十二月の羊は嚮の三四年生の羊と匹敵する肉を産出するを得たり、然らば則ち生長期は三乃至四分の一に短縮せられしにあらざや、蘇格蘭の劔牛は之を龍動の市場に輸すに、四年の日子を経て八百斤の牀量を有せしも今日にては三年以内にして同體量の劔牛を出だすに至りしと云ふ、今歐羅巴に於ける羊の體量の増加を平均して比較すれば左の如し。

年 號	體量
一八七一年	五十一斤
一八八四年	六十一斤
一八九一年	七十一斤

此の如き重量の増加は單に羊にのみ限らるゝにあらざ、何の動物にも適證し得べし、蓋し飼養法の發達に由るものなればなり。

方今生物學者と心理學者の銳意講究する所にして他日愉快なる効果を收むべしと思惟せらるゝ問題は家畜の教育なりとす、教授ヘル氏の言を聞くに動物と雖も

農 業 本 論

農

業

本

論

訓育の方法を盡さば亦能く言語を發するに至るべしとラボック氏は曰く、動物に算術を攻習せしむる事は必ず効果を見るべしと、此の事若し必竟懸空ならずとせば、惟り農業のみならず商估も亦犬猫に事を任するの日も來らんか、果して然らんには、今日の社會の組織、亦た意外の變動を惹起すやも知るべからず。

此の餘農家加動物界に及ぼす響影の一に算ふべきは現在無用の動物を播致し之を馴養驅役して世用に供するにあり、緬甸國にて蛇を馴養し之れを咬獵に使役するが如き、近來諸國にて傳書鳩を訓育するが如き、鹿の牧場を構えて其の肉の供給を増加するが如き、諸種の蟲類を飼養して人類の食料に供するが如きは最も著名なる者なり、蝗蟲の如きは如何なる國にても之れを食すれども、農家は惟り害蟲として孳々驅除に従事するが如きは頗る矛盾の現象ならずや、人類の食料たる者ならば之れを飼養して可なり、農に害する所を去り、人に益する所を選みて世用に供するは、正しく亦農家の天職として研究すること至當ならん。

亞弗利加の南端、喜望峰附近の蠻民は蟻を食し、墨西哥にては一種の甲蟲の卵子を水中に撈取して食に供し、ホットテントット人は蜘蛛を噛むが如き、其の他蟲類の食

論 本 業 農

膳に供せらるゝ者猶多かるべしと思惟せらる而して既に野蠻人之れを喰ふとせば文明人も亦之れを喰ふべからざるの理なかるべし是故に割烹料理の術益精緻巧妙を窮むるに於ては人類の食用に供給せらるべき動物の數多々益増加あるべし現今巴里の有名なる某料理店に於ては割烹術の巧みなる爲め蛙の類を甚だ珍重して美味と稱するに至れり勢ひ是の如くむば是等動物は天然生の者のみにては需用に應し能はざるべく從て之れが繁殖増加の方法を講せざるべからざるべし况んや農業は人類食料の供給を以て主要なる目的と爲すに於てをや農家豈に這般の事實を雲煙過眼して可ならむや想ふに近來ロマニースの流其の卓拔せる動物心理學を以て社會に立ちダルクウカン及びモルガン教授の徒輩出して動物心理學の研究愈濫奥を闡くに於ては動物馴養の方亦益容易となるべく農業の動物界に影響する勢力は亦愈重きを致すべきなり。

農業と土性

以て種莖耕種に資すべき耕地は些々二三尺の深さに過ぎず猶且地球表面の狭局に限制せらるゝを以て假りに地球の厚さに比し又面積の大なるに較べ見れば復惟

論 本 業 農

だ九牛の一毛のみならざるべし然り而して今此の壤土の耕種が地文的影響を逞うすと説かば或は異むべきに似たりと雖も魯酒薄して邯鄲圍まる原因と結果との連絡を照査し來れば亦當然の由なしとせむや試に之れを論せむ抑又た彼の地理若くは地文の學を講ずる者は何を以て直ちに其の問題の主と爲すや問はずして先づ人類なるを知らむ然らば則ち五尺の軀を守りて十三四貫の體量を有する人類が日々經營の耕種も亦能く地に影響するの大を異しまざるべし而して今復た其の反對に此の二三尺の厚さを有する壤土の性質に由りて人類の生活が如何に影響せらるゝやを思はざるべからず。

アイサーヤンク曰く所有權の魔力は砂礫を化して黄金と爲すと信なるかな言や今嘗試に之れを論ぜむ凡そ灌溉若くは排水事業は長日月に彌らば爲めに土性を以て必然一變せしむべし例令ば武藏野の沃野も四五百年以前に在ては菴澤の地にして一帶卑濕なりしも爾來月を積み日を重ねて開拓せらるゝに及びては草原森林其の迹を留めず今日に至りては土性全然一變して粘土は砂を交へられ砂土は復た粘着の性を帯び土性自ら更り乃ち地利盡さる所なきに至れり凡そ這般

の實例は世界各國の土を異にして轍を同一にせざるはなく皆な耕作を業とするに伴ふ自然の成果たらずむばあらず、惟だ埃及國が特別なる狀況に制せられて古今其の土性を變更し能はざりしものあるのみ、土性變更の事は土性學者の研究に委ね、余は只地文學上説く所の土性の一條目に關して二三の言を挿むに過ぎざるべし。

人工を用ひて土性を變更すべき方は、排水、灌溉、培養、容土法等を以て主要なる者とす、余は曩に灌溉排水の氣象に及ぼす影響を説きて未だ土性に影響する事實を辨せざりしが、其の事實も亦容易に推知し得らるべし、何となれば水潤卑濕の地、漸々乾燥して空氣の流通を促すあらば、有機物は徐々に腐敗して土性自ら變更せらるべければなり。

泥炭地が耕地に變化發達する事實も亦著しく土性を更むる事を知るに足る、又灌溉して新地を開拓するに、初年の禾田を稱して苗と曰ひ、次年即ち二回の種藝を營む者を畚と曰ひ、三年目に始めて始めて新田の稱呼を得るが如きは名の異なるのみならず、亦土性の變化を推知し得べき也、概近農業の功利漸く進歩するに従ひ、彼の

論 本 業 農

論 本 業 農

所謂沈澱法の術益々巧緻を窮め泥土を含有せる濁水を畝場に漉ぎて肥料分を收め、以て古今ナイル河の天然に造營する所を人工的に施行し得るに抵りしが如きは、亦土性の變遷に影響を呈すべし。

容土法は我國の農家も常に行ふ所にして、遠所の土壤を荷搬して之を一定田畝の土壤に混耕し、更に新土壤を造るものなり、獨逸國の北部に散在せる泥炭地に於て「リムバウ」法と唱へて近來盛んに行はるゝ一種の容土法は、卑濕の地面に三四寸許りなる一砂層を藉きて土壤の調和を爲し、以て栽培するものにして「リムバウ」氏概近の發明に繋るを以て此の名ありと云ふ、然れども此の方法は、米國に於て業に百年前より行ひて成効し、我國に於ては佐藤信淵翁亦壓鑛法と稱して此の法の利を講説せり、諺に所謂佛の初は七初とは、夫れ此を謂ふか呵々、其の他往々吾人の目撃する所の河流の破地に堤塘を構えて、河水漲溢するも猶ほ侵浸の害なからしめ、土を荷搬して之に藉き、以て新土層を形成し播種耕耨する法あり、如此きは伊太利若くは瑞西の輪畝を旅行したる人の特に記憶に存する所なるべし、是れが爲に該地方の所謂荒川は益河幅をめられ、狹兩岸の耕地増加するに至れり、又獨逸國に於て

農業本論

葡萄の産地を以て著名なる萊因若くはモーゼル河の沿岸を旅行したりし人は農夫が背に土を負ひて丘陵の崖を攀ぢ辛うじて其の丘陵の半腹に徐々葡萄園を開きしを實見せしならむ。本邦の山間地方に於ても亦た之れに同じき方を行ふ所稀れなりとせず。亞刺比亞シナイ山の寺院一廓の土地は原來土性礫悪なりしかば嘗てナイル河の河泥を荷搬して栽培に利し、モルタ島の農用地は大概シ、リ、島より其の土を運送して積蒔したりと云ひ、本邦の北海岸特に能登附近の如きは海岸に木材を植ゑ連理の柵を作りて海藻塵芥の潮の爲めに陸上に打揚げられたるを扞止したる後、土を運搬して之れを蔽ひ茲に新田を開くに至るを見るは、又海沙即ち漢土古代の土性變化法の實例と爲すに足る。

人口次第に増加せば、耕地も亦從て廣きを致さるべからず、是に於てか非常の勞役を起して猶且つ土地をして其利を盡し、稼穡の道をして愈普及せしむ、之れを實例に徴するに獨逸國ウエストフアレンに新たに移住したる貧民の開墾地あり、此地は原來不毛の砂地たりしも、其の砂層は僅かに三尺乃至四尺に過ぎずして其底盤は反つて粘土より形成せられしかば、移住民は該砂層を掘りて下底の粘土を取

り之れを表層に藉し、今日は繁盛なる一沃田を爲すに至れり、支那に於て從來行はれし架田の如きも亦辛勞多き禾田たりしなり、今農政全書の一節を掲げて此の架田の法を概見すべし。

考之農書云、若深水藪澤、則有葑田(又名架田)以木縛爲田丘、浮繫水面、以葑泥附木架上、而種藝之、其木架田丘、隨水高下浮泛、自不滄浸、周禮所謂澤草所生、種之芒種是也、云云、架田は惟り支那のみならず、本邦にも實例あり、余嘗て駿河國の浮島に遊ひて名に負ふ浮田に就て調査したるに、汚池に就て浮田を作るの方法は、豫め蘆葦を束ねて之を暖の形に浮かし、其上に「コモ草」を載せ置けば、年を経て草生、蘆を爲し草根交々相錯綜して宛も羅織の如し、遂には固着して普通の暖の外觀あれども、五六年を過ぎざれば其の上を歩するに危険なり、恁して田面に浮暖を構設したる後は、水流自然に遲滯を來たし、水藻地衣等の植物、浮暖の陰に方て水面に生ず、此の細小なる草根の腐植は更に新芽を出すの基をなして、遂には青氈を敷くが如く、稍固着す故に暖若くは田には些しも粘土あるなし、是れ小藤氏の所謂粘土なきの田は無類と云つて可ならむと説きたるものなり。

農業本論

此の餘肥料が土性を變更するは多言を要せずして明瞭なるべし、然れども茲に特別著明なる一實例は伯林と巴里の近傍に於て市街の糞尿を集めて栽培する蔬菜園に若くはなし、其の肥沃なるは四隣の地に比し明かにして、其の色の黒澤なると、手に觸れて指掌の感覺の善きと等は實に肥料の効驗著しきに驚かざるを得ざるべし。

近時微生物學は迅速なる大進歩を爲して其の應用も種々の方面に及ぶに至りたれば農業も其の澤を受け、微菌を土壤に混じて力を増すの新法行はるゝに至れり肥料の土性を變更するが如く、肥料を施さずして耕作を營む掠奪的農業の土性を變更するも亦明白なるべし、凡そ米穀を播種する者にして肥料を施さざるは、土地を耗殺する者(Sand killer)なり、地若し滋殖生養の力を亡は、稼穡其の據を失ふに至らむ、是故に掠奪的農業は一には國人の本業を涸ぼして文明の運を害し、一には疆土を磽瘠ならしめて罪を農祖に自はむ、リービヒ氏嘗て國家文明の由來を説きて疆土の生産力の増長にありと爲したるは固に至言にして、史乘に徴し違はざるを知るべし、例を東洋に取らむに彼の支那國が唐虞三代の文明以來、今に幾千年時に

論 本 業 農

論 本 業 農

隆替を歴て目下老朽國の名ありと雖も、其の人口を問は、實に幾億萬の大數を有し、其の所謂中原の領域は從來江河の間に限界せられ、尙ほ且つ古往今來耒耜の營稼穡の業一律もて繰り返しつゝも、國土益豐穰、天府の國と稱せらるゝは何ぞや、政教の民心を涵養したりしに因るか、制度の善良なりしに因るか、否、主として土地の生産力を消耗せざりしが爲めのみ、曆は以て農時を便令し、渠は以て瀉斥を灌し、國人皆本に就きて罪を農祖に負はざりしに由らずむばあらず、之れに反し得失地を易へたるは實に伊太利にして其の土は著しく磽瘠し、耒耜の利殆んど興すべきなく、種藝も施すに術なく、后稷ありと雖も亦手を拱かずむばあらず、行客喟然として往時羅馬の盛を想ふ毎に、此の瘠地が如何にして能く當時の民衆を養ひしやを嗟嘆す、疑ふ勿れ是れ實に掠奪的農業の結果なる事を。

結 論

農の業たる諸般藝術の中、最も進歩を見ざるなりと雖も、小心視察し來れば顯微の間、其の地文に對する影響の忽せならざるを知らむ、今を以て來を考ふるに趨勢益農事を革進して廣且つ密なる一科學藝を完全するに至らば、其の影響や定めて地

論 本 業 農

球面上の面目を一新する者あらむ。
 人あり嘗て全世界の農區を論じて曰く、赤道より北緯三十五度に至る間は灌溉に依るべく、三十五度乃至四十五度は培養を以て主法となし、四十五度より六十七度に至る所は排水に依頼し、六十七度以上九十度以下は農を營む能はずと、化學を以て米國に有名なるワイレト氏の見解に據れば、天然にて土壤に存在する「ボタシ」の量は二百五十年間植物の營養に資せらるべく、燐酸は二百二十五年間資せらるべしと、されは以上の星霜を経過したる後には、或は荒蕪を開拓せざるべからず、或は此等の肥料を、他に仰かざるべからず、若し然らむには高山を開墾して含有する肥料を收め、或は土層を崩鑿して此を耕地となさざるべからず、或は「ニトラキ」の施用を愈熾にせざるべからず、竟に是れ植物の生長に必要な肥料は、之れを集收せざるべからざるは必須の事に屬す、必須の迫る所は困難をも冒さざるべからず、力をも役せざるべからずして、其の地文上に及ぼす影響も、亦今日に於て豫想せざる者出でむ、或は荒蕪を開拓すとせむか、其の疆域は猶ほ甚た廣し、南北亞米利加若くは濠州の大陸は方今未だ百分の一だも耕耨せられざるにあらずや、其の他舊世界

論 本 業 農

に於ても小亞細亞、中央亞細亞、亞刺比亞、埃及、北亞非利加、印度等は更に往古の農況に回復せられざるべからざるなり、人力を以て生産地となすべき土地は、大概斯の如し、而して斯く人為の範圍に土地を征服せんには、獸類の助力に俟つこと頗る多しとす、アウグスト、コムト氏曰く

蓋時昔て神靈の力極めて重きものあるに就きて神人親和の一團環を夢想せしも、若し神人親和の一團環を成就すべくむは、禽獸も亦克く人類と親和の一團環を成し能はざらむや、然り而して此の團環にして若し望むべくむは、開は只愛を以てするの道あるのみ。
 假りに馴養し得べき動物と人類との連合が成就せしものとせば、其の包括すべき勢力、外に對して果して如何ぞや、是實に實驗哲學の造效雄偉なる所以にして、今此の連合の勢を以て無機界に臨まば、信に世界の有益なる資材源を發きて生物同盟(Biogenic League)の威を彰はすべし、上は上帝を崇めて統帥に任し、高等動物は之れが部局將校に類し、爾他の動物は器械となり、吾人の手中に委ねられたる物質は、更に機械の補助に用ゐらる、一言以て之れを蔽はゞ世界を運盪して一意志の下に働かしめ、以て必至の事實に拮抗して社會の完全を應發するにあり。

と救世主降誕の後二世紀の頃、ヘビヤスと稱する一尊宿が世界の將來を豫言して

曰く。

葡萄園には萬本の葡萄樹生長し、一本の幹には萬本の枝を生じ、一枝には萬本の芽を生じ、一芽には萬の房を垂れ、一房には萬粒の果實を結び一粒の果實は萬斛の葡萄酒を造るに足る、此の實を採らむとして聖徒葡萄の樹に近づけば房は争ふて己の美を誇りて曰はむ、我を採りて神に謝せよと、夢も亦葡萄と同じく蕃行して、其の一粒は萬斤の粉を興ふべし、是の如きは葡萄と夢とのみならず、萬物も皆な之れを以て推知すべし、世人或は之れを嗤はむも、信仰ある者は我言を疑はざるべし。

余は今此の章を終るに當りて、學術の知識を尙ばざる古の尊宿の言と、宗教を輕視する實驗哲學者の所説が、共に農に俟ちて吾人の理想を實在ならしめむとするの點に於て、圖らする兩極歸一の投合せる者あるに感じ、轉て將來の世界を推想して快に堪えざるものありと云ふ。

農業本論

第十章 農業の貴重なる所以

農業を貴重する理由

本編の後半は農業と社會生命の關係緊密なる所以を説述したり、即ち農業と國民の衛生と題して、農民の新鮮なる血は市街に生活する所謂都人士の血統を維ぐべく、一國強兵の基礎も彼等農民に繫るとを言ひ、農と人口と題して、人口の増加、配置、都會人民の充満増加の過度の節損は、皆な農に因るとを言ひ、農業と風俗人情と題して、農民の野鄙なれども質樸なると、固陋なれども耐力に富むと等、總ての風氣は悉く田圃耕耨の際に陶冶せらるゝとを言ひ、農民と政治思想と題して、急激なる政變も農民の爲に調和せられ、過激なる民權説も農民の爲に輕緩せらるゝとを言ひ、農業と地文と題して、農家の業務は荏苒長年月の間に、所謂あめつちをも動かす底の大事業を成すものなりと言へり。

讀者は既に農業が吾人の社會に於ける生活に無量なる勢力を有する所以、即ち農業の貴重すべき所以を曉りたるべしと雖も、以上の所説を以て、猶ほ未だ農の貴重

農業本論

すべき所以を詳かにせしと言ふべからざるが故に、更に農を貴重する理由を説き
茲に本編の結尾と爲さむとす。

農者經國之基礎なる一句は、東西古今を論せず、皆之れを不易の金言として信奉せ
ざるなし、然り衣食供給の源泉實に茲に存す、之れを貴重するも亦宜ならずや、
惟ふに漠然農を貴ぶと云ふと雖も、之れを貴ぶべき理由を陳述するに當り、立論法
に二様あるが如し、一は之れを主觀し、一は之れを客觀す、主觀的貴農説は抽象的に
立論し輒もすれば、則ち過當に涉るの傾向を有し、或は政略上人民の觀心を買はむ
が爲めに賞揚し、或は感情に訴へて賞揚す、故に詩人、政治家、間々此の方法に頼りて
貴農説を述ぶ、宋仁宗慶曆間、議欲弛茶鹽之禁及減商稅、范仲淹以爲、今國用米省、歲入
不可闕、既不取之山澤及商賈、必取之於農、與其害農、孰若取之商賈の如き亦一例とも
見るべき歟、客觀的貴農説は統計其の他諸種の事實を集め、農の社會に及ぼす影響
を計りて立論するものにして、其の所論の材料は盡く具體的なり、故に實業家、經濟
學者は常に此の方を用ゆるが如し、猶ほ實例を以て説明せむに主觀論者は米の貴
重なるを説くに、其の一日も人生に缺くべからざる所以を述べて、其の耕作者たる

論 本 業 農

農家の貴重なるを摘舉し、客觀論者は先づ米穀を耕作するものは果して幾何の農
民なるや、其の米の收穫は幾何の國民を養ふべきや、將た米は國民の何如なる食物
なるや、他の穀類に比して其要用の厚薄等、總て米の價值を可及的數字に表示せむ
ことを勉む。

農を貴重すの理由を説くにも自ら輕重ありて、主觀的及び客觀的立論に由て明白
に其の差別を認め得べし、例令へば戰國の世に在ては干戈の外、又た顧慮するの暇
なきが故に、國民の念慮は一に戰客に傾射し、勢ひ農を輕む武を重するの風あり、又
國民舉りて貿易若くは工業に力を盡す時代に在ては、農を輕視するの傾向あり、或
は太平至治の餘、國風奢侈優遊の世代に在ては、實業を輕易に付し農業の盛衰に心
を存せざる、亦た數の免かれざる所なり。

然れども是等の事たる單に一時に止まりて決して永遠に持續するものに非ず、人
心稍沈靜なるに至れば自ら其の眞面目を透見し、其の重んずべきを重じ、輕すべき
を輕するに至るべきなり、假令和蘭にありては青魚を以て、英國にては鐵、石炭を以
て、國の財源と稱し、白耳義は商業を以て立つと稱す、固より國によりて經濟的國是

を異にし貴農の觀念多少の輕重ありと雖も、尙ほ農に對する國民の自覺に於て異なるなきなり、請ふ此の理を説かむ。蓋し工業如何に進歩して無數の烟突高く雲表に聳ゆるも、國家は獨り純然たる工業に依てのみ樹つ能はず、商業盛にして千百の商船港灣に輻輳するも、尙商業のみに由て國を保つ能はず、是れ兩ながら其の原料を農業に仰くに由るが故に、絶對的に農を不要視する理あらざるに因る。然らば如何なる時代、如何なる邦國が特に農を重ざるや、暫く時と所に依りて立論を異にする所以を去りて、農を重する理由は那邊に存するや、蓋し主として左に述ふるが如き理由に由らん。

人種に由て農業に輕重を措く

抽象的に農を貴重する事が、人種に伴ふて差あるを發見すべし。余の謫劣なる未だ適當の理由を知らずと雖も、蓋し人心に固着せる愛土心を制し禁むると能はず、自ら一國の人情、風俗、美術に顯現するものあり、固より此を貴重するの度が人種の異なるに伴ふて輕重あるは事實なり、是れ三四國民に對照するに英國人の田舎を好むは世の皆知る所なり、即ち詩家文章家の著作、重農の氣風を存せざるはなし、英人

論 本 業 農

自ら亦能く是れを認識す。カークライル嘗て曰く英國人は、見世持の國民なりと是れ英國に於て中流以下の人民は土地を所有するに難きか爲に、姑らく見世持となりて生計を營むも、多少の儲蓄を有するに至れば、好みて田舎に土地を購ひ移住する風習あるに由る、國家も亦た小農の保護及び獎勵に關する法令を出すに躊躇せざるに徴するも、國家全般の氣風を知るに餘あらむ、特に外國人にして此の國を旅行せる者は著しく其の田舎好きの情を目撃すべし、今一二の例を擧げむに、大英國農業經濟論の著者たる佛人ラベルン氏、スケッチアップの著者たる米人アイヴング氏の眼には如何に映したりしか、英國の詩人にして愛鄙的思想を吟咏に彷彿せしめざるは稀なり、但アン女王の世は英國文學の中興と稱せられたる有名なる詩人出でたれとも、田間の行事、生計等を吟咏の材料に取りたるものは甚だ少し、然れども其の時代前後に著名なる文人詩伯の撰著を繙讀すれば、亦皆田舎を描寫せざる者なし、余嘗て英文學を好みて、聊か管窺蠡測を試みたるに、文中往々田舎を好愛する感念の斯く迄に強旺なるにやとて、信に一驚を喫する者あり、其の貴族富豪の如きは好むて田舎に住宅を構ひ、首府龍動に住するは冬期避寒の計たるに過ぎず、故

農 業 本 論

に龍動府中官衙商會の外に、大厦高閣の比較的少きは紳士の住居概ね田舎に在るを以てなり、蘇格蘭人は此の感念一層大にして該國の詩宗ラムゼーの如きは身自ら商賈たりしにも拘らず、好むて牧夫農民の情況を表顯し、彼の匹敵たるブルンズに至りては鋤を提け馬を追ひ、自ら耕作に任し、勞働の際心に感し詩情を動かすものあれば、直ちに筆を搦つて、之れを撰せしかば自然農に繋かる事の多からざるを得ざりしなり、蘇人は實にブルンスを崇拜すると特に甚しく、之を渴仰すること神靈の如し、曰はく、其の一言一句として、蘇人の思想を代表せざる者なしと。米國人は英人の血統なるを以て農を貴ぶの情も自から肖似す、加之其の國新聞なるか故に、國粋の共和政治なるにも拘はらず、一層農業を貴重するの傾向を見る、政治家、文學者の好むて論ずる材料、好むて營む業務は大概貴農の事實にしてワシントン、エメルソン、ソロー、ハニチエル、パロース諸氏の言に據つて知るべし。以上數國の國民に反して農業を重ぜざるものは、西班牙、以太利等の國民、即ちロマンス種に屬する種族なりとす、此等二國民の人情は都會を好むて田舎を忌むの風あり、貴族等の邸宅も多くは都市に建築し、農民と共に田野に住するを嫌忌す、以太利人の此

農 業 本 論

の風を養成せしは中古以來なるべく別に解釋すべし、以太利美術の現存せるものに就て觀察せば、其の然るを知らん以太利は繪畫に於て萬國彼に比肩するものなきの絶技を有す、而かも古來より其の諸大家が田舎農業の景を描寫せしもの甚だ少なく、人物肖像にあらざれば花鳥美人王宮都會等の繪畫にあらざるは莫し、獨り佛との異なるとは、トイトニツク種族と、ロマンス種族との差の如し、獨人は田舎を好み、佛人は比較的に好愛の念薄し、佛國に農民の割合に多きと、國産が重に農産物なると、重農説の本國なりしを以て佛人の愛農心若くは愛田舎心を斷定するが如きは甚だ大早計たり、何となれば佛蘭西の農民の如きは、分配法に基きて遺産等を相続處分するものなればなり、彼等全般の思想は全然英國の見世持國民と反對し、營農に由りて少許の儲を獲れば直に村間の商店を開き、因て多少の貯蓄を生ずれば好むて都會に出で商業を營まむとする者なり、客あり難して曰く、子詩歌咏吟に據り國民の農業に輕重を措くの標準を取るは寧ろ獨斷なるなからん乎、且つ本論々據と相伴はざるを奈何せん、予對て曰く、國民の性情を知るは詩歌に徴するより善きはなし、詩歌は性情の露布せしものなれば、一毫も偽を容る可らず、是れ昔

者采言の官ありて國風に鑒み、民の情偽俗の高下を察する所以にあらざや然らば則ち詩歌に顯はるしものを取つて以て國民の嗜好の準則と爲す、何の不可か之れあらん、適以て論議を精確に爲すの資とせんのみと。

農業を貴重するは習慣より來ると多し

何の邦國人種を問はず、經濟の原始は天産物に衣食し、終に進歩發達して邦國を爲すに至るとの説は、歴史家社會學者の既に是認する所なり、然るに人民常に漁獵等の利を追ひ、天産物の豊凶により移轉し、住居の一定せざる間は邦國を成し、農業を爲す能はざるは自然の理なり、故に邦國を成すは、先づ境界を正し民地著するに在り、水草を追ふの民、如何ぞ國家を建設するを得ん、希臘の神話に農の神デメートル婚嫁の制度を定めて社會の秩序を創定せしと傳へたるは、農の起りて始めて國家の基を立つるを得たるの意を寓したるなり。

換言すれば農業なるものは邦國を成すの始めにして、邦國は農業に由て始めて其の形態を爲すを得るものなり、左れば農業は其の由來頗ぶる久遠にして祖先必らず遵奉せざる可らざる業務と信じ、假令星移り物換り他の業務頗ぶる進歩し獨り

論 本 業 農

論 本 業 農

農業を以て最も樞要の民業と稱するを得ざる、社會進歩時代に於ても尙ほ古を欽慕し舊業を改むるを欲せず、計算上損失あるも尙ほ他業に轉遷するを忌み、勞働は第二の天性となりて、隋性的に農事に従ふ者なり、由是觀之、農業は營利の事業と言はんより寧ろ單一の舊慣に止まると言ふも大過なからん、農を重ざる感念も之れに等しく商工未開の時代には、農を以て唯一の職業として營みたるが故に、因習の久き今日も猶ほ是の感念を脱せざるのみ、本邦開闢以來農を以て國本と爲すの大義は普通歴史に明記する所にして、保食神が蒼生に食を與へたまひし古傳に據るも、上古より國本は農に存すると一人の異議なきを信ず、然るに一事の甚だ疑ふ可きあり、何ぞや既に前文に陳べし如く、天産物に衣食するの時期を経過し、而して後耕耘の時代に推移するは各國の沿革進歩に照して争ふ可らざる事蹟なり、然るに本邦のみは此の變遷の順序を踏まずして一躍農業時代を現はしたるは、果して何に由る乎、蓋し開國創世の祖先は外國より渡來の人種にして既に本國に於て天産物に衣食するの時期を経歴し、渡來の始め恰も耕種の業を知れりとせば、幾分の疑問を氷解するに足るも、本邦歴史の教示する所に據れば、神州開國の祖先は蠻民の

稍進歩したる者の渡來したる種屬ならむか、若し然らずとせば必らずや上記の経過なき能はざる理なりと信ず、嘗て古事記を讀み、彦火々出見尊山幸あり、兄火闌降命は海幸あり、漁釣弓矢を換ゆるの項に至り、竊かに謂らく是れ天産物、即ち漁獵の利を獲る者なれば、神代の末は、即ち正に各國の人種が經歷せし農業期に變遷せんとするの期なりしならん歟、且つ尊兄弟高田、下田を作る云々の事もあれば、且つ耕耘し、且つ漁獵の利を獲しものたるを推知するに難からず、是れ太古の農業の歴史に就き考證せしに過ぎざるを以て、學證の長短は姑く措き、國民一般農耕を貴重する心思は遠く神代に始まり、爾來上皇室より一般庶民に至るまで、其の教育蕃化を受けたること、茲に數千年、されば本邦人の農業を貴重すると他邦人に超過するは、舊慣遺俗の然らしむる所たる、敢て怪しむに足らざるなり。

農業を貴重するは時勢の反動として起る事あり

商工業隆盛に赴むき世人之れに嚮向するときは、資本家は財力を擧げて貿易を營み、將た工事に利得を收めむとして努力し、小農野夫に至るまで皆商工の益多きに趨りて自ら農業を輕ずるに至るは、免かれざる所なり、於是乎反動の勢を生じ、俄然

論 本 業 農

農業の輕す可からざるを説き、反動の結果を見るに至る、第十八世紀の央、英國の經濟は長足の進歩を爲し、外國貿易内國製造の業大に興起せしが、之れと同時に貴族は農業の貴重すべきを説き、在野の有志家も農業振興策を唱道し、シンクレール及ヤングの兩氏運動に非常の力を盡くし、終に農務省を創置し、農業の恢復を見るに至りたるは、特に反動の勢此の効果を奏したるにあらざるも、而かも反動の勢も亦預つて力ありしや明なり。

佛國に於て昨世紀の半頃、クローチ、チユルゴ、氏等の名士輩出して専ら天則論、即ち重農説を唱へて、單に之れを學理の當然と論ぜしのみならず、政治上にも實行して其の勢炎の熾なりしと一時當るべからざるものありしが、此の學説の起因は當時諸種の原因に促されたる者なりしと雖も、主として前第十七世紀に行はれし尙買學説の反動、マルシヤル氏の如く、重農學派は尙買學説の見解を一層擴充して、泛應曲當せしめしと論するも一理なきにあらねど、見るべし、されば農民貧、則其國必貧、其國貧、則其國王亦必貧、*Pauvres paysans, pauvre royaume ; Pauvre royaume, pauvre roi.* とは此重農學派の全科玉條として彼の禾穀よりも其の代金を崇め、商工を保護し

て農民に薄うせし尙賈學説と背馳したり。
 又羅馬の詩伯ウイリキリユスが農業を吟咏せし詞賦は有名にして、氏自ら此の業を嗜好するの餘縫雲繡月の作を得たる者乎、或は曰く、氏の友メシナス當時農業の衰退を痛嘆し重農の氣運を挽回するは氏の健腕佳句を借り、一世を振作鼓吹するより佳きはなしと信じて、氏に著作を委嘱せしならんとの説あり、信偽遽かに判定し難し、此の他道德敗類したる時は貴農の念を高めて國民を質撲の田舎風に變化せしめむと努めたるとは歴史上往々見る所、既に農業と風俗人情の章に詳論せり今復た贅せず。

穀の貴き論

夫珠玉金銀、飢不可食、寒不可衣、然而衆貴之者、以上用之故也、其爲物、輕微易藏、在於把握、可以周海內、而亡飢寒之患、此令臣輕背其主、而民易去其郷、盜賊有所勸、亡逃者得輕資也、粟米布帛、生於地、長於時、聚於力、非可一日成也、數石之重、中人弗勝、不爲姦邪所利、一日弗得、而飢寒至、是故明君貴穀而賤金錢、(前漢書食貨志)
 是れに類似の文字は何國の文學にも散見せざるはなし、蓋し何の國民も、穀を以て

農 業 本 論

主食物と爲すが故に、貴穀の言ある元來當然にして、本邦の農家の如きは苗代を稻木様と敬し、米粒を菩薩と貴ぶを以て慣習となす、隨て穀を生産する農夫の日用行事は他の職業にも勝りて貴重せられ、公御財、若くは大御寶とも古き書に記されしは以て尙ふべからざる所なり、今は姑らく此の極端に越れる見解を和げむか。
 大凡何如なる事物を論するにも同一名詞を用ゐて全然別異の意義を顯はすとあり、或は廣義に用ゐて含蓄を擴め、或は狹義に用ゐて一局に限り、時に或は名詞の指示する實物を描きて徒に文字に泥むものあり、例へば人は萬物の靈長と謂ふは其の智能の靈活なる所以を指せども、同じく人なる文字を用ゐて人は蟲なりと謂ふか如きは其の肉體の醜なるを指したるものに外ならず、水は人生缺くべからざるものと言ふは是れ吾人か飲む少量の水を指すもの、水害と言ふは積水の分量、洪々滔々として人力の得て制すべからざる者を指すものなり。
 單に穀と曰は、朝夕の食物の原料を意味するか故に吾人が生命の資糧として一日も缺くべからず、乃ち珠玉にも勝りて貴重の者なりと云ふに在り、然れども穀の物たる、未だ必ずしも絶對に吾人が生命の資糧にのみ使給せらるゝ者にあらず、四

論 本 業 農

千餘萬石の米は盡く吾人か口を潤はすの飯粒にあらざして、二三千萬石を除去するの致高は必要の用とは見做し難き、寧ろ有害なる酒を醸すに四百萬石之れを缺くも不可なき間食の菓子に三百萬石、其他糊漿の類にも亦必ず萬を以て計算すべき石高を損すべく、猶ほ犬猫を飼養するに全國を通しなば數千萬石を耗すべし、同じく是れ穀の名稱ありて、或は吾人の生命を繋ぎ、或は吾人の生命を害し(酒)或は犬猫の枯腸を肥やすべし、是に由て之を觀れば穀は、是れ貴し、穀は是れ貴からず、人或は難して言はむ、穀を用ゐて反て人生を危害すと論するか如きは、豈に穀の罪ならむや、水の性卑きに滋潤す、激して之れを行らば山にも在らしむべし、是れ之れを行つて激せしむるが故に、山に在るのみ、穀を用ゆるの誤れるに由りて其の害反て斯の如しと、然れども余は茲に經濟學者の所謂物件利用を倫理的に評論するは、甚だ枝葉に涉るの嫌あるを以て之れを省略し、唯穀物は實際幾何の貴重なるものなるかと云ふ問題を説述するに止めむとす。

ラボンス容て其の著經濟論の中に價値に就て論じて曰く、物件の價値は其の實用の最低限(Final Utility)の程度を以て確定すと、例へば予が家年々十石の米を收入す

論 本 業 農

とせば一家數口の飯料に三石を消費し、酒菓調度の購買代金に二石を宛て、衣服の代金に二石、厮役の給金、犬猫の飼料に二石を要すと假定し、殘高一石は入用なければ之れを慈善に棄捐すべし、然るときは家族の口を糊すの三石と犬猫の飼料と其の米たるは即ち同一なるも、其の價値を均すべからざるや論なし、何となれば犬猫の食は去るべくして家族糊口の米は缺くべからざればなり、然らば予が一家に入用なる米の價値を定むるに、猫の飼料を以て必要の標準とすれば米の價値も勢ひ少小なるべく、人の食料たる米穀の必要を以て價値を論せば、頗る高貴なるを免れざるべし、而して經濟社會に於て全般物件の價値は如何なる必要の程度に據りて確定すべきやを顧るに、最少の必要程度を標準として算するものなれば、此の例に於ても猫の飼料の入用を以て米の價値を定むべし、而して近世經濟學者の所謂奧國學派は斯言(Grenznutzen)を敷衍して諸般の問題に適用し、又餘蘊なからしめたり。

是れに由て之れを觀れば、穀を貴しと論するものは最低の實用程度に就かずして、最高の實用程度に因るものなるを以て稍真相を蔽ひたるの言たらずむばあらず、

從て主觀的に穀は人の日用の食物なり、故に米を作る農民は最要の職業を營む者なりと斷定するが如きは、政治家若くは文學者が辯舌の勢、筆端の餘其の場合に適はしむるものに過ぎるべし、今日の複雑なる社會に於ては、如斯簡單なる論法を用ゐて職業の輕重を確定し難し。

農業には自然の作用多き事

經濟上の生産は土地、勞力、資本の三要素を以て成るとは、普通に學者の言ふ所に於て先づは學理上の定説なれども、此等土地たり、資本たり、勞力たるもの果して幾何の範圍に於て土地たり、資本たり、勞力たるかと言ふに至りては、學者の間に往々説の歸一する所あらず、今假に此等三要素は正確に内容を畫すべく一定の範圍を固有するものと假定し、先づ第一要素たる土地に就て説述すべし。

經濟學書を涉獵するに第一の要素を名づけて或は土地とし、或は自然とす、土地と自然と名稱の差異あるにも拘らず、其の指示する所は皆主として耕作を營む土地に就きて説かざるはなし、或は道路も家屋の建坪も山林原野をも含蓄せざるにあらざるも、何れも耕作地に比ふれば問題の材料たるは稀なり、是故に所謂土地は土

農業本論

農業本論

地にあらず、反て其の小部分たり、即ち概して耕地の面積たるに過ぎず、况や自然と稱するか如きは總括の統名にして實を去るの寧ろ遠からむとを恐る、然り而して猶ほ此の自然なる文字を使用する所以は、氣候江海の屬を兼該包括し得らるればなり。

土地或は自然を以て生産の要素たらしむるものの中には、或は礦業若くは狩獵おれども、斯の如きは極めて輕きものにして、偏へに農業の力を以て大且つ宗たらしむるものと知らざるべからず、土地を生産に利用するは單に農業と云ふも不可なきが如し。

商工業と雖も土地、即ち自然あらずんば、業務を營み難きは閭里の童穉も尙ほ分明に之れを知る、彼の商工業に於て或は電氣を利用し、或は蒸氣の力を藉るも何れか自然力にあらずらむや、然ども其の利用する自然力と、農業に於ける自然力と別異なる所以を究むれば、一は人工的に自然力を制御して利用するもの、一は自然力を増減變更するとなく直に之れを用ゆ、例へば製造家の蒸氣力を利用するや、自然に散在する蒸發氣を直接に働かしむるにあらず、即ち絶對的に自然に放任すると能

論 本 業 農

はずして、火力を藉りて以て其の欲する局所に働しむ、之れに反し農家の日光を用ゆるや、偶帶色の玻璃を以て光線を人工的に利用するが如きとあるも、是の如きは農の主たる事業にあらずして、通常は一旦種子を播種したる以後、風雨光熱等一に皆天然に任せて増減變更するにあらず、若し夫れ或は田圃に肥料を施し、或は排水、灌溉を行ひ、或は耕耘して土地の天然の性質に變更を與へ、因て植物を蕃衍滋長せしむるは、主として人工的作用に歸せざるを得ずして、宛かも製造家の石炭を燃きて機械力の造營を藉ると一般なり、周約農業の専ら行はるゝ地方に在りては土地は殆ど製造品の如し、乃ち數千人の手に委ね、年月の経過を俟ちて造爲したる者に外ならず、其の氣候に至りても或は防風林、若くは其の他の事實の爲に、次第に人工的となりて、天然の働きは益微弱を致せしと雖も、要するに農業は他の職業に比し自然の力に俟つと一種特別なるものあるは、竟に疑を容るべからず。

土壤相匹類すと雖も、氣候に因て生産額に差等あるとは、麥の收量の國土の異なるに伴ふて多寡あるを見て知るべし、博士ルードルフ曰く、麥の收穫高を當初播種せる種子量に比較すれば、獨逸にては五乃至六倍、匈牙利にては八乃至十倍、南米ラフ

論 本 業 農

ラタ地方は十二倍、墨西哥の北部は十七倍、南部は二十四乃至三十五倍に當ると云ふ。又英國農學の大家ロース、ギルバート兩氏の試験に據るに、麥は其の莖節の成分を地に資ると五プロセント、大空に取ると八十五プロセントなりと、爾餘の植物に至りても其の長育を爲す所以のものは、大空日光に仰ぐと地に取るものよりも多し、是に由て考ふるに人工を以て造營したる土壤も自然的滋長力に於ては之れを大空に比ふれば、寧ろ僅少なからざるなきか、乃ち農業は主として自然力に待つある大なるとを知るを得べし、自然力の農業に重きを爲すと斯の如きを以て人間社會に於ける自然法則の勢力の大なるを認むる者は、亦深く農の重むべきを覺るべし、昨世紀に於て世間に「經濟學者」の稱呼を被むりて萬物の消長一に自然の法則に律せらるゝ旨を唱道したる學派あり、其の學理を「ヒョオクラシー」と名けて一時非常の勢力を有し、其の農業に對する見解の如き甚だ壯快にして純益 (product net) を與ふるものは止だ農業のみ、商工業は預からずと爲し、極言して曰へらく、單に物件の形狀を變更し、若くは物件の所在を移轉せしむるものは毫も生産業と唱ふるに足らずと。

論 本 業 農

「ヒアオクラット」即ち天則學派は斯の如く農の貴重なる所以を説明したるが故に或は「農業の徒」と稱せられ(本邦に於ては重農學派の譯名あり)其の學理も爾來種々の評論批判を経、今日經濟學の進歩は斯學派の所説を論破し得たりとなすも、余を以て觀れば未だ必ずしも徹頭徹尾、蛇足の説にあらざるが如し、但だ天則説、重農説皆な共に極端に走りたるの弊あるを病むのみ、今の農業簿記の不完全なるは遂に純益の計算に就き精密の調査を望むべからざるも、農産事業は之れを他の産業に比べて、根本的差違あるとは以上に反覆せしが如し、但だ余は未だ商工業と農業との間に存する差等の性質に就て、將た差等の分量に就て、如何に徑庭する所あるかは爰に明言するの力なきも、他年必ず天則學派の唱道したる純益論の其容姿を革めて、復活再燃あらむを信ずる者なり。

土地報酬遞減法

珠玉金銀貴ぶべからざるか否か、古の人、謂へらく珠玉を以て外を飾るは人々奢侈の心に基づくものなりと、是なるか抑も非なるか、人の好奇愛珍の念は何如なる心理の作用に基源するやは、茲に余の預からざる所なれども、愛珍好奇の念は各人に

論 本 業 農

昔ねき所なるや知るべし、詩伯シルレル方に死に臨みて以爲らく、死の人に於けるや未だ必ずしも不宜にあらざるべし、然らずむば何ぞ斯の如く一切の衆生に隨はむや」と斯言直に取て吾人の好奇愛珍の念、亦不宜にあらざるとを説明し得べし、珍奇是れ愛み珠玉是れ貴ぶは人の常情のみ、野蠻人も文明人も同然異ならず、是故に珠玉を以て外に銜ふもの、何ぞ必ずしも人々の奢侈心となすべけむや、愛珍好奇の念、不圖も實用的發見の動機となりて利用厚生の効を社會に成せしもの、蓋し鮮少ならず。

若し經濟を言ふもの、徒らに物件の實用にのみ拘泥し、其の罕有なる事實に留意する所なくむば、到底價値を識得せざるべし、曩に穀物の貴重なる所以を説明するに際し、價値なる者は實用の程度、即ち必要なるか入用なるかと、罕有の程度即ち多く存在するや稀に存在するやとに因て確定すべきとを述べたり、是故に若し我日本全國に於て止だ一本の禾穀を有すとせば、其の一粒は猶ほ金塊にも勝りて貴重ならむ、然るに四千萬石を收穫し得て、全國同胞に均願せば一人一石を所得するが故に、時に一石二十圓の相場を見て、格外の高直となせども、若し後來人口増加し、一人

農 業 本 論

所得の割合一斗若くは一升たるに至らば其の貴きと更に一層を加へむ。
 經濟學の端緒を窺ふたるものは業既に知らむ、土地の産額は必らずしも資本及び
 勞力の程度に隨ふものにあらざると、言を換へて言はゞ土地の一定度の産額以上
 は、資本及び勞力に對して報酬の割合を減ずるとを、左に之を詳説せむ。
 穀物を産するに就きて、土地の營爲する作用は、第一、植物の滋養分を供給すると、第
 二、植物に其の支持たる面積を與ふるとなり。滋養を給するとは化學的作用に頼り
 て爲され、其の増減損益は一定度まで肥料等によりて影響し得らるべきも、面積を
 與ふるとは物理的にして人工を以て如何ともすべからず、且つ土地の植物滋長力
 は肥料を施すに由て増減するとも亦た自然の制限ありて一定度を踰ゆ可らず、例
 へばシユエフレル氏の試験に據れば鹽若干斤を施して既に其の地の産額の一定
 度に達したるに、其れより以上の鹽を施したるは反て損害を招きたり、又クルマ
 ン氏の試験に據るに一町歩に魚粕六百斤を施して五千斤の乾草を收め、其の二倍
 を施し辛うして八百斤の増加を見たり、三倍を施したるに其の收穫は八百斤を施
 して獲たる増加の割合に比して一層減少せりと云ふ、凡そ肥料は其の何種類たる

農 業 本 論

を問はず、等しく皆な上例の如し、又た一定の限度を超えて除草耕耨の爲めに勞力
 的集約農業を營爲するも、比較的多量の收穫を見ざることあるべし、此の他土地の
 深耕は同じく、或る程度までは收量を増加すべきも、一定度を超ゆれば其の効なき
 ものとす、チユールナル氏の試験に據れば、四寸の深さに耕すべき土地を六寸の深
 さに犁鋤する時は、播種量施肥量同一にして七分の二の收穫を増す、然れども之れ
 より深く犁鋤するも、其の增收の比例は漸減せり、即ち土地の産額は必らずしも勞
 働及び資本の程度に隨はざるものなることを知るべし。
 植物に其の支持たる面積を與ふるに至りては、廣狹増減を容さざるゝと絶對なるも
 のなれば、有限の面積を以て無限の植物の培養に應ずべからざるは理の最も見得
 し易き所とす、田面に挿秧するに、株と株との間隔を六寸と定めて、反毎に三石の收
 穫を見るとせば、毎株の間隔を三寸に革めて挿秧するも四倍は措きて二倍の收穫
 だも望むべからず。
 以上土地の生産力と面積等とに就きて、收穫の一定度以上は寧ろ割合に減却する
 ものなることを説きたり、これを經濟學の辭に要約すれば、資本勞力に對して收穫の

漸減と云ふ。今左に之れを表出せむ。

耕夫の數	一町歩の收穫高	百町歩の收穫高	一耕夫の所得
一〇	二〇〇	二〇〇〇	二〇〇
一二	二二八	二二八〇	一九〇
一五	二七〇	二七〇〇	一八〇
二〇	三二〇	三二〇〇	一六〇

以上の法則は單に農産物のみならず、他の職業にても亦同し、鑛山を鑿掘するに一定の勞力者を用ゆれば、鑛夫の所得も資本家の所得も割合に多けれども、多數の鑛夫を使役すれば、兩々其の所得を減少すべし、商の利益も亦同し、市場を専有すると競争を營むとは其の所得日を同して説くべからず、而して鑛物は山野の一部なれども、農産物は土地の一部にあらず、土地に産して人力に培はれ、年々新に成る所に於て、其の一定度以上に在りて收穫の割合漸減するは、活物有機體の自然の法則に隨ふのみ、鑛物鑿掘業に於ける利潤の漸減と等しからず。

論 本 業 農

論 本 業 農

今後農業の進歩して漸減の法則を薄弱ならしむるとあらむには、甚だ慶賀すべき所なれども、農業の進歩は人口増加と相伴ふて、永く世界の人民をして食に窮するを免がれしむべきやと問はれ、到底然りと答ふるを得べからず、今世界の人口を十五億と見做し、現今増殖の率を一年に千に就き八とせば、二百年を出でずして六十億萬となるべし、此の人口を以て耕地に分割せば、一英方里に對する密度は二百人となり、五百年を経過せば千人となり、但し爾後五百年間には人類の食物は如何に變化すべき、推知すべからずと雖も、解剖學若くは生理學上より推考するに到底農産物を離れて食物を求むべからざるや、明らかく、農業又た如何に長足の進歩を成すとも、五百年以後の地産力は蓋し漸減法の掣肘を免かれ、茲に到りて穀物の價値は益々貴重なものとならむ、珠玉の如きは或は化學の力にて製造し得て今日の罕有の性質を失ふに至らむも、食物に至りては益罕有の性質を加へ來りて之れを貴重する觀念を高むべく、農業の益貴重なる所以を覺らむ。

農産の物價を説て農の貴重なる所以に及ぶ

晚近世運の推移、日用行事も經濟作用に支配せられざるなく、總べて經濟の綱維を

以て社會の事柄を経ず、是れスヘンサーの所謂殖産の社會(Industrial Society)シナイストの所謂營利の社會(Erwerbsgesellschaft)にあらずや、人は麵包のみを以て生くるものにあらざると雖も、人として一日再食せずむは則ち飢え、終歳衣を製せずむは則ち寒く、宿りて雨露を凌かずむは則ち病む、是に由て之れを觀れば所謂經濟作用は止に生理的に吾人の命を制するのみならず、心理の上にも亦能く重要なる増減を爲すものと知るべし。

經濟界に於て日夜消長する斯の作用の影響は、其及ぼす所頗る廣且つ精なるを以て、之れが討究の路に當るもの須らく小心留意して社會構造の全般を通覽せざるべからず、是れ社會は有機體なるが故に、經濟界に生滅する萬般の事實は屢單に經濟界にのみ生滅するものにあらずして、局處の疼痛は全身を惱ましむるに異ならず、然り而して經濟體は屢痼疾に染み易く、動もすれば全社會を惱ますと多きが故に、學者は常に經濟體の脈膊を檢せざるべからず、經濟體の脈膊とは他なし物價を謂ふ、物價の高低は或は徐に或は急に、常に搖動して止まず、以て經濟社會全體の情況を現在せしむ。

業に穀物の價値を論じて價値は該物件の實用程度と其の罕有なるとの二件に由りて確定すべく、實用は需用を招くの基準有は供給を爲すの原始となるべし、普通謂ふ所の物價は需用供給の平衡に成るとは、即ち價値の二件に因りて確定するとの理に外ならずと云へり、今之れを要約せば物價とは價値を通貨に換算したる者に外ならず、通貨とは價位の確定不易なる物件を標準と爲し、一切物件の價値を較定する所以の具なれば、普通金銀を以て之れに充つる所以も、亦此の二物の供給に著しき増減あらざるか爲なり、若し此の標準にして屢其の價位を變易せむか、一切の物件も隨て價値に變易を蒙むると、宛も地盤の動搖して亦地表の森羅萬象をも震盪せしむるか如し、然り而して金銀二物も亦一種の經濟的物件たるが故に、供給の増減消長あるを免れざるべし、乃ち一切物件の價値は四時變動して止まずと雖も、其の變動の程度鮮きのみ、輒近西伯利亞及び亞米利加の金山發見、中世南米の銀山發見等は、何れも咸な世間の物價に著々影響ありしに非ずや、特に近頃銀の著しく下落せるは吾人の當前に注視する所なり、最近アラスカ及び其の他の金山の發見ありて物價は方に自然の騰貴を速くにあらずや、故に辨濟期日の到來まで永年月

を曠ふする貸借契約の目的物に金銀を用ゆるときは、貸借金の實價と返済金の實價とに未だ必ずしも平衡を見ると能はざるべし、約言せば金銀は永年月に渉る經濟的負擔を尺度するの標準に適せず、乃ち金銀に代るに農産物を以てせば甚た便宜なる可しとの議論、常に經濟學者の間に唱道せらるゝに至りたり、其の故如何、請ふ之れを説かむ。

原來農産物の需用は人口に關係あるものなれば、人口増加して食を需むるに劇なるや、農産物の相場も自然高直となるべくして、人口の増殖は自然に成り、移住民を以て増加する場合を除き、須臾一旦にして見るものにあらず、且つ供給は常に需用に隨ふものなれば、其の増益の模様は宛も駭々然として谷に趨むくの蛇の如し、著々秩序を追ひ、順次を整ふて進將するものなり、若し或は百穀稔して民富み、荒蕪開墾せられて供給遞に増益せば、人口も亦自ら増加の度を高めて需用供給は殆ど舊様の平衡を持續すべし、總て經濟的物件の中に就きて農産物の如く需用供給の平衡等均なるものはあらず、農産物は原來實用に消耗せらるゝが故に、世間一時の流行を受くるが如きとなく、又甲の作物は濕潤を歎して、乙の作物は濕潤を好むが如

論 本 業 農

論 本 業 農

き、年に旱魃あり雨天多きともありと雖も、損益相補ふて漫に凶荒の懼れ少なし、時に或は飢饉の患を脱かれざるも、此の種の災亦他年農業の進歩に隨ふて輕減せられ、或は滅盡せらるべきは吾人の想像し得べからざる所にあらず、斯の如く農産物の相場は短年月の間には増減高低波濤の如しと雖も、永年月を統計せば増減あらざると、一萬水平の毫も窒礙を見ざるに似たり、茲に永年月云ふもの敢て限りなき永年月の謂にあらず、即ち大凡そ二十年乃至四十年を以て一期となし、數百年若くは數千年を統計すれば即ち足れり、然る時は期々相互の間常に相等均にして但た全体に時を追ふて自然に騰貴するの傾即ち相場線の平均線の順序正しく自然に高まるを見るべし、是れ即ち農産物の金銀と大に差等ある所以なり、是れ金銀は年々の相場に差異なきも數百年若くは數千年を統計せば相場線の平均線は著しく高低の迹を有するが故なり、又之れを製造品と比ぶるも大に差異あり、何となれば製造品は分業の發達若くは機械の發明等に由て常に其の相場に低落あるべきは自然の理なればなり、今統計を以て之れを表せむ。

世界農産物及製造物價格累年比較

マルホール氏調査

年 號	農 産 物					製 造 物				
	穀類	肉類	乾酪類	羊毛	棉花	鐵器類	木材	石材	織物	絲毛
一七八二—一九〇年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一七九二—一八〇〇年	一三三	一四二	一三三	一三二	一〇〇	一三二	一三六	一〇九	一〇七	一一三
一八〇一—一〇年	一五五	一八八	一六七	一五九	一〇〇	一五九	一六三	八五	八三	一一三
一八一—二〇年	一七五	二〇八	一九〇	二〇六	一〇〇	一八一	三三八	九	八三	一一六
一八二—三〇年	二八	一五七	一五五	九〇	一〇〇	一四四	一〇八	九	五八	九三
一八三—四〇年	二〇	一七三	一四四	一五	一〇〇	一四四	一〇八	七	五八	九三
一八四—五〇年	一〇五	一六五	一五五	六〇	一〇〇	一三三	一〇八	七	五八	九三
一八五—六〇年	一三六	一八〇	一七五	六〇	一〇〇	一三三	一〇八	七	五八	九三
一八六—七〇年	一三三	一九〇	一九八	四六	一〇〇	一三三	一〇八	七	五八	九三
一八七—八〇年	一三五	二〇〇	二一八	三六	一〇〇	一三三	一〇八	七	五八	九三
一八八—八四年	九六	二四四	二三三	三〇	一〇〇	一三三	一〇八	七	五八	九三

論 本 業 農

本項の所論と表の明示とに據りて推測するに、農産物は其の價格實に秩序的順序的にして、一切物件の消長増減千變萬化なる經濟界にありて、計量器に所謂不動點とも稱すべし。若し農産物微少せば、農産物微少き社會は想像し能はず。物價の變動は猶ほ一層甚しく有機性たる社會の脈膊は宛然熱病患者の脈膊の如く甚しき高低を認むべし。猶ほ本表を見るに農産物の價值漸次上昇する傾向を存するは余の既に言説したる漸減法の作用に支配せらるるものなり。即ち農産物を生産する業務は一には經濟界の急激なる變動を防ぎ、一には漸々價值を増益する貴重物件を耕作蕃衍せしむるの營爲なれば、他の職業に比して一層重きを存すべきは事の宜令と謂ふべし。

農は廢物を利用する事

バックル氏謂へらく文明とは自然の物質と力とを人類の用に供するの謂なり。此の言や惟りバックル氏のみならず、諸學士の通説と見るも不可なかるべし。夫れ然り故に世人は蒸氣電信の大用を見て文明の利器と稱して驚嘆せざるはなし。惟ふに現今學術の進將は隱微なりし自然力を顯にし、天下の廢物を收めて更に新資

農 業 本 論

財源と爲し、利用厚生の方に於て治からざるはなし、特に這般の進將は百年以來工藝の駁々快速なる開發を以て見はれし所に於て、僅に數十年以前に在ては無用の長物として利用の方に苦みたる「アルミニウム」を以て今日は諸般の器具を造るに至りたるが如き、近くは海水に含まれたる黄金を採るの方法を覺知せしが如き、總て工藝の途に於て學術の驚くべき實用を示せるもの、十九世紀の造効と爲す。

廢物の一を世用に供するだにも吾人は實に賞賛して止まざるに、矧むや單に無用の長物たるのみならず實に有害なる物質を用ゐて、社會に利益を興すに至りたるは豈に驚くべきの効果ならずや、バストール及びコック諸士は、彼の原生の害毒なるを防殺する方法を案出して人類の恩人と崇められ、世人に醫の仁術なる所以を覺らしめぬ、農の廢物を利用するが如きも世に効あると、曷ぞ原生の毒を發見せると異ならむや、尿尿汚穢の物を收めて利用厚生に資し、蔬菜穀類を耕作して天下の黎民をして飢えず凍へざらしむ、其の効何ぞ醫の仁術に譲らむや。

尿尿送尿は吾人の日常生活に於て自然に爲す所なり、而かも吾人の之れを語るに公然たらず之れを正視せざる所以のものは外表脩飾の上に於て止むべからずと

農 業 本 論

雖も亦無責任と謂はざるを得ず、若し之れが利用の方を講ずるとなく、漫りに之れを道傍に棄て、顧みる所なからしめば人類の衛生に就きて亦も如何の害を流すべきぞ、今人類尿尿の量を計算せば其の額實に巨大なるものあるべし、農學士森要太郎氏が研究せし所に據れば本邦人は概して一箇年平均九十貫即ち一石八斗を排泄すと云ふ、肥桶一荷の容量を十五貫目とすれば平均一人六荷を産出する割合なり、最近の調査に係かる我人口は四千二百七十萬六千九百七十九人なり、此の全國民の一箇年間糞尿產出量は二億五千六百二十四萬一千八百七十四荷なり、若し一荷二十錢とすれば實際東京附近の價格は二十五錢以上なり、五千一百二十四萬八千三百七十四圓八十錢なり、是の巨額なる肥料代金は實に泰西人の知らざる人糞の利益なり、人糞決して輕んずべからず。

「金も尿なら尿も金」とはユーゴーが哀史に於て言ひし所即ち尿尿も亦一種の富と稱せられべく、尿尿中に含蓋せらるる元素は收めて用途に供せば頗る吾人の利益となるものあり、例令へば「アムモニヤ」を製し燃燈の瓦斯を此に資らむと計畫せり、現に獨逸のボーゼンの一都會に於ける某旅館の如きは便所に機械を置きて瓦斯

を尿尿より採りて燃燈の料に供すと云ふ、然れども歐米に於ける尿尿は其の用途未だ昔からず、國の文明を稱せらるゝと益大なれば益亦尿尿を海に棄て河に流す等、銳意之れが爲め掃除の方法を講究せざるはなし、若し農家の之が利用を爲すものなからしめば世人は實に此の尿尿汚穢の物を如何とも處し難かるべし、前章掲げたる家畜の頭數に基きて、是等動物の年々排泄する糞尿の量を推知すると難からざるべし、今幸に佛國政府の調査に係る歐羅巴諸國の家畜糞尿量の概算を得たれば下に掲出すべし

國名	噸數	價格
大英	24,000,000	11,000,000
佛蘭西	20,000,000	10,000,000
日耳曼	11,000,000	5,000,000
露西亞	11,000,000	5,000,000
埃太利亞	100,000,000	20,000,000
伊太利亞	100,000,000	20,000,000
西班牙及葡萄牙	10,000,000	5,000,000

論本業農

國名	噸數	價格
白耳義及和蘭	10,000,000	5,000,000
瑞典及諾威	10,000,000	5,000,000
土耳其	10,000,000	5,000,000
歐羅巴	10,000,000	5,000,000
合計	117,000,000	58,000,000

論本業農

尙ほ此他本表に載せざる國を合算せば恐らくは此に二倍するものとならむ、且つ加ふるに人尿を以てせば一層多額の代金となるべし、今一人一年間の尿尿の價格は廉くとも一圓の市價を得べく、歐米人のは一層高價なるべし、我國の農業は主として人尿肥料を施すが故に外人の我内地を旅行するもの、毎に臭氣の困難を訴ふれども是れ熟慮せざるの甚しきのみ、歐米に於ても後來必ず之れが利用の方を計るに至るべきや期して俟つべきなり。

以上は主に人類と家畜との肥料に就きて説きたれども、此の他猶ほ農に在て始めて利用せらるゝもの甚だ多し、家畜の以外なる鳥類の糞、就中秘露の「グァノ」は實に

論 本 業

巨額の需要あり、即ち千八百五十年乃至八十年の間に千二百萬噸を輸出し凡そ十億萬圓の代金を收めたり、魚粕も需要汎し、其の他植物性の物に至るまで、一々計算すれば何れも巨萬の金額に上るべく、製造業に由て生ずる磷酸質物及び其の他の廢物は何れも皆農を俟て利用せらるゝものなり、嘗て米國の炭礦に於て粉炭の利用なかりしが爲めに、殆ど數萬町歩の地積を蔽掩して且つ數十尺の山を爲すものありしが聞る農に於て此を利用するの途を開きたる者あり即ち之れを土地に散布する時は土地は漸く黒色を帯びて爲に太陽の光線を收めて地温を高む乃ち壤には無用の廢物なりし粉炭も今は賣買せらるゝに至れり、如此く總べて效を擧げ利を盡すは、農に於て最も較著なるが如し、然り克く有害を變して有益と爲すにあらざや。

上述する所は皆本粗略の説にして僅に事の大槪を擧げたるに過ぎず、若し詳密なる調査を爲したらむには農に俟ちて利用せらるゝ廢物の量、殆ど夢想にだも及ばざる程の額に上るべし、是を以ても農が社會の大機關たり、人類の重業たるを知るべきなり。

農は商工業の基

人或は人類の經濟作用を農工商の三類に分別して各自獨立の分界を領し、各其の分界の内にて營む作用を異にし、又自ら其の性質を異にし、利益も亦從て相反するが故に所謂道同むからずむば相爲に謀らざるものゝ如く論ずる者なきにあらざれども、少しく思考を費したるものは直に經濟界には調和と名くるものゝ存在を認むべきは、敢てパスチエーの言を俟たざるべし、調和とは三生産作用の完備して相互扶植するに於て若し今其の一に偏倚あらば三者の扶翼の利を喪ふと云ふにあり、以上二様の説各一長一短あり、何となれば三者或は利害を異にする時あるべく、又或は利害を共にすべき時あるべければなり、試に工業と農業とに見るに工人は通邑市街に住むを利とし、農夫は田舎に住むを以て便となすに徴するも、明に此の兩業の間利害の相異なるものあるを見む、兩者の利害を共にするも亦同むく推知すべきなり。

工業には種々の種類ありて、太古には木匠金匠の類色々に分れて、其の數止に數十のみならずし、現今に至りては工業の類別實に甚だ多種類となりて、猶ほ年の經

論 本 業

農 業 本 論

過を以て増加を見ると、春雨の澤に竹筍の芽さすが如し、米國の「セッサス」(毎十年調査)英國の所得税の徴收簿「レヒー」氏の職業別の論、獨逸國の民間職業別の種類を一覽せば我國に行はれざる許多の職業を數ふべし、我農商務省の統計を閱するも工業の種類を九種類に大別して織物、棉絲、紡績、陶磁器、漆器、青銅器及び銅器、摺附木、紙、墨表及び臭莖類と爲し、此外水産物の製造あり、食鹽業あり、林産物の製造業あり、一々是等を細別せば、工業の種類殆ど數百を數ふべし。然るに此の百般の工業の中、原料を農産に仰がざるもの幾どなし、縦しありとするも、開は窮めて僅少ならむ、原料を農産に仰くものは實に大多數を占む、煙草、製紙、製茶、生絲、砂糖、種油及び生蠟、漆汁、酪業、製皮、綿、麻、亞麻、羊毛等數ふるに遑あらず、今工業の中、直接間接に農産に關するもの幾何なるや、座右に統計表を置かざれば數を以て詳悉し難けれども、若し農産物に原料を仰く能はずとせば、世界の工業は單に水産と礦産とに原料を需むるに止まるべく、此の二産の任の如何に重要なるにもせよ、各國を通して此の二産のみは依頼する工業の範圍は未だ甚だ大なりと謂ふべからず、鐵と石炭は英國の富なりと誇稱すれども、是れ止だ英國に限れるものなり、世界を通觀して立論せば決し

農 業 本 論

て重きを置くに足らず、見よ英國人は自國の富の羊毛即ち農産物にあるを示さむが爲に之れを袋に收めて堂々たる議事堂に備ふるにあらずや、實際、綿、毛布、亞麻、皮の類の原料を農業に仰くものと以て鐵類を製造する業に比ふれば寧ろ範圍の廣大なるを見るべし、亞米利加に於ても金屬類を原料として従事する業務は到底農産物を以てするもの比ふれば僅少と云はざるべからず、和蘭は水産物を以て有名にして、鯨を以て無盡の財を有すと誇れども、開は止た和蘭の小區域に限られて昔からず、剩へ同國にては常に海水を排して耕地を作るに汲々たるにあらずや、近來世間に商本主義、又は工本主義を唱ふる者あり、若し其の意見にして、農工商の何れにか民力を傾くるの急務なるを説く者ならば、須らく研究すべき所なりと雖も、或は絶對的に農本を排して商本、工本を説くに至りては本を離れて末に趨くもの管へは、太陽系に屬する惑星が太陽を棄て或は地球本主義或は木星主義を立てむとするが如し、太陽の引力を絶ちて地球、若くは木星の獨立すべからざるを知らざるの説なり。

工業に見て斯の如くむは商業に於けるも亦推して知るべきのみ、商業の當初は食

農業本論

物の交換なりき、今日も尚ほ食物の交換は盛に行はると知るべし、但し遠隔の地と交通を賈くに及び、漸く農産物の交換貿易を營むの不利なるに會せしかば、極めて最小の極めて運搬に便なる且極めて高價なるもの即ち、眞珠、金銀、寶石、絹繭等の珍奇なる飾装品を用ゐたり、是れ即ち、俗談に上る「寶船」の真相と知るべし、歲月の荏苒、人事の推奪に由て、海軍派船の世となり、萬里を往來して有無を通ずるに至りて更に再び農業物が貿易品の主位を占むるととなりぬ。

歐羅巴人一人の一年間に用ゐる穀物は四百二十英斤、歐羅巴全土の年々輸入する穀物は六拾六萬噸にして、此内歐洲の各本國に生ずるものは甚だ少し、重なる國を掲げて左に例證せむ。

英國に於て自國産と輸入に係る食物を消費に費やす日數を以て算するときは一

小		麥	
年	號	自國産	輸入ノモノ
一八六〇	一八七〇	二百四十四日	百二十二日
一八八〇	一八八九	百四十二日	百四十四日
		二百二十四日	二百五十一日

年間左の如し

農業本論

佛國に於ては當世紀の半頃には年々三萬五千噸の穀物を輸入したりしが、近來にては百萬噸を輸入するに至りぬ、獨逸に於ても亦年々數萬噸の穀を外國に仰かざるべからざるに至りぬ、惟り露國のみは今も猶ほ自國産の消費に充て盡なるを以て、剩餘を外國に輸出するなり。

印度より歐洲に輸入する小麦の額亦甚た多し、年の豊歉によりて増減する所ありと雖も、少くも三十三萬噸を下らず、多きは百六十萬以上に上る、其の他南北の兩米大陸より歐洲に輸入する小麦の額も亦甚た多し、千八百七十三年より千八百八十三年まで十年間に北米合衆國に仰きたる所のみを以てするも十二億フダシエルの巨額に達し、其の重量は八千萬噸にして、運送費の額、國內にて毎千英里に四億萬

肉		年		號	
自國産	輸入ノモノ	年	號	年	號
三百四十日	二十日	一八六〇	一八七〇	一八八〇	一八八九
三百二十三日	四十二日	一八七〇	一八八〇	一八八〇	一八八九
二百三十六日	百三十日	一八八〇	一八八九	一八八九	一八八九
二百二十三日	百四十二日	一八八九	一八八九	一八八九	一八八九
二百二十三日	百四十二日	一八八九	一八八九	一八八九	一八八九

合計 三百六十六日 三百六十五日 三百六十六日 三百六十五日

弗に達し、國外の運送に費やす所亦之れと大差なし、穀類の商業上に重要な地位を占むると實に斯の如し、猶穀物の貿易の範圍廣大なるとは、ノイマン、シバラルト氏の世界經濟に就て知悉せられたし。

運搬の時間を費すと短きと、運搬中保存の方法を工夫したるとに由て腐敗し易き農産物も近頃は萬里の遠きに輸出せられて世界人類の食料を充たし、英國にて食用する生肉は之れを亞米利加、濠州に仰くが如き、龍動の料理店にて客に供する野菜は佛蘭西、白耳義より來るが如き、紐育の野菜、果物の珍物は米國の南方に取られ、鶏卵の如きも亦數句を費して數萬里に輸送せらる、若し此の如き類例を蒐集せば一冊の書を爲に餘りあらむ。

目今獨逸のハレ大學にて、農産物商業學なる講座を設けあるが如き亦如何に農産物の貿易品中重要な位を占むるやを知らむ、商業貿易は唯農産物の爲なるが故に今日の隆盛を爲せしと云ふも敢て過言にはあらざるべし。

農は國富の基

一國の經濟的發達は農の重要なる所以を輕減すとは夙に世人の唱道する所にし

論 本 業 農

てリスト氏の所謂社會發達の順序とは最初は農業の社會、稍進みては農工業の社會、終に更に進みて農工商業の社會となるは、何れの民族をも通して經歷すべき所なりと云ふにあり、今其の義を要約するに初め農は國富の基なりしも、時勢の進歩は他の生産業を進めて多少貴農の情を輕からしめたるを云へるなり、之れを一家の生計に較ぶるに貧の度益甚しきに準し、生活費の大部は食料に費消せられ富有の度愈高まるに準して食料の生活費は愈小部を以て足るべし、佛蘭西に於ける下等人民の食料費は其生計總費用の五割七分、中等は五割三分、上等は四割一分を費す、獨逸に於ては下等は六割二分、中等は五割八分、上等は四割二分を要する食料に充つる費用は、人民生計の程度高まるに従ふて減少するものなり、此の理を以て直に一國に於ても、文化の進むに順して食物の生産額は他業の産額に比して割合減少するものと云ふを得べし。

故に英、佛、獨、米の諸國に於て收入の總額最も多きものは製造業にして、魯、埃、伊、西にありては農業なり、是れ他なし魯、埃の國情、米、獨の國情に一等を輸する所あるに由る和、白、瑞の三小國に至りては農業を營むの面積極めて狭く、且つ工を營まむには

農 業 本 論

第十章 農業の重要なる所以

材料乏きが爲め、主として商業を爲すものゝ如し、マルホール氏の調査に依るに千八百二十年以來歐米の諸國にて其の生産業の収入額は平均三十四割の増進を見たり、中に就き進歩の最も著しきは製造業にして、其の進歩の度は百二十二割、商業之れに亞きて八十九割、農業は商工業に比して進歩の遅緩なりしが爲めに七十年間に於ては十七割の増進を算ふるのみ千八百二十年に於ては農業の収入國民の全収入額の半はを占めしが、八十八年に至りて遂に製造業の収入額の爲に超過せらるゝに至れり、即ち同年の百分比例は工業三七、農業三一、商業二三、運送業八の割合なり、左に國別の一表を掲ぐ。

國 名	農 業		製 造 業		運 送 業		商 業		合 計	一 人ノ 收 入 額
	價 額 比 百	例 分 價 額 比 百	價 額 比 百	例 分 價 額 比 百	價 額 比 百	例 分 價 額 比 百	價 額 比 百	例 分 價 額 比 百		
英 國	三五	三三	四八	三三	一三	六	三〇	三七	一九七	五
佛 國	四二	三〇	四八	三三	九	七	三〇	三三	一五六	三
獨 逸	四〇	三〇	五三	三三	一〇	八	三〇	三三	一五五	三
露 西 亞	五三	四〇	三三	三三	九	八	一〇	二四	一五五	三
埃 太 利	三三	四	二五	二	五	八	一三	七	七四	九

農 業 本 論

人或は本表を見、卒然として農は漸次貴重の度を減却するものとなさば、是れ甚だ

總 計	伊 太 利	西 班 牙	葡 萄 牙	瑞 典	瑞 士	和 蘭	丹 麥	丁 威 廉	諾 威	瑞 士	白 耳 牙	瑞 士	其 他ノ諸國	歐 州 計	北 米 合 衆 國	加 拿 大	英 國	阿 爾 然 丁 州
三六一	一七三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三二	四九	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
二五〇	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
二	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
四六八	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五	八五
三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六
八六四	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
八	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
二八二七	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五
三三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三三、三三〇平均	四九五	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三〇	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五

正見にあらず、其の故如何、猶ほ一家の次第に富有の度を高めて食料費用の割合を減易するか故に、食物の必要の度は減少せりと言ふに異ならざればなり、上掲統計は諸職業の生産額を市價に積りて甲乙を付したるのみにして、農の生産する所、工の如く、商の如く、暴かに進む所なき所以のもの、反て是れ農業が社會萬業の根抵たる事實を表したるなり、乃ち農産が物價の激變を緩むるの世に大益ある所にして一家の富の高まるに準し食料費の減少するは家人の食量及び食の必要を減したるに因らざると一般なり、富めるが故に食はざるも飢えず、貧なるが故に多食せざれば飽かずと云ふの理あるべからず。

農業以外の職業の進む事上の如し、而かも製造業にまれ、商業にまれ、運送業にまれ、其の原料や、其の貨物や、皆何れも資を農業に仰がざるはなく、此等諸般の進歩も其の本を顧みれば何れも農に俟たざるはなし、然れども一旦農工商の分業樹立せる今に暨び、敢て其の源に遡り漫りに農の恩を説くの要あらむや、農と工と商と、何れか獨立の産業たらざるべき、但商工二業の農と背馳するが如く思ふは斷じて可ならず。

第十章 農業の貴重なる所以

四〇

再び上表を見るに農業の収入額最少なるは英國にして、和蘭之れに亞ぐ、然るに此二國は單に外面皮想の觀察を以て、其の國民經濟の真相を知るを得ず、何となれば、此等二國は廣き殖民地を有し、農産物を斯に仰ぐを以て英本國の如きは、ピクトリガ女王の領域の一小部分に過ぎずして、宛も大貌利大尼亞帝國の一大都會とも見做すべく、東西兩半球に存在する廣大なる殖民地領は宛も其の田舎と見るを得べし、故に歐洲諸邦に於て生産業の割合を論ずる者は、亦眼を殖民地の生産業に留むる所なかるべからず、濠州に於て商業は他の業に比して割合に盛なるは、濠州文化の進歩的なるが爲に然るに非ずして、農産物の販賣高の多きが爲なり、故に、獨逸國にては砂糖、珈琲、茶の如き物品を一括して殖民地物産(Colonialwaren)と稱す、是れ明に彼等が農産の一部を必ず領地より仰ぐとを表明するの辭なりと知るべし。

白耳義、瑞西の如き殖民地の廣からざる國に在ては専ら商工の業行はれ、其の利益を以て外國より農産物を購賣す、表に見るに同國の農業収入額は尠少なれども、他の収入を以て農産物の購賣に充つるが故に、彼等に在ては農産物は一層價值の大なるものありと知るべし、故に若し統計に拘はりて農に疎かなるも猶ほ一國の人

第十章 農業の貴重なる所以

四一

民は食を憂へずと云ふが如きは、宛も工匠の喩話の如し、嘗て一工匠あり一年二百圓の賃銀を獲得し、其の餘暇後園に耕鋤して二十金の價格を有する馬鈴薯を穫たり、彼曰く我に在ては此の食料は手腕の工銀一割に過ぎずと、言はば如何、此の工匠は從來二百圓の二割を食費に充てたるものにして、大工を營むは、食物即ち農産物を得んが爲めなるを忘れたるなり、白耳義、瑞西の商工を營むも亦農業を營むに餘地なきに由り、結局農産物の不足を充さむが爲め商工に頼りて収入を裕かにするものなり、是に於てか農産物は彼等に取ては更に貴重のものとなり、農業の重むぜらるゝ更に一層を加ふに至るべし。

農は諸職業の中、最大多數の人を要す

穀物は日用の食料なるが故に其の貴きと眞珠玉にも優れりとは既に説きたる所なり、今や穀物は粒々皆辛苦の結果なるが故に貴しと云ふとを述べむとす、食物なるが故に貴しとは演繹的論法にして、勞苦の結果なるが故に貴しとは導る歸納的論法たり、穀を説て食物なるが故に貴しと爲すは結果の價値を重むざるものにして、勞苦に生ずるが故に在りと爲すは穀を獲るの容易ならぬに重きを措くも

論 本 業 農

論 本 業 農

のなり。

嘗てアダム、スミス氏其の富國論の卷首に、富の基は勞働にありと記したり、此の言や、輓近學者の議する所たるにも拘らず、克く萬世の金言として十分の眞價を見るべし、如何に機械の發達し、如何に資財の豊富を致し、如何に土地の豊饒を成すにもせよ、勞働は世の寶なり、人類の徳なり、勞働に由りて獲る所の物品は、縦し玩弄物たりとするも、其の勞働や決して輕きにあらず、況や吾人の食糧の供給者に於てをや、農の貴むべき理由は何れの國にありても之れに従事する人民の大多數なるにあり、然れとも各國文化の進歩に伴ふて、農民の數の減少を見ざるとなきは、尙ほ農業の收入額の割合が漸減すると同一の理と知らる。左の一表を熟視せよ。

人口千人中各種生産職業ニ従事スル者ノ割合 マルボール氏調査

國名	農業	工業	商業	計	雜業
英 蘭	五二	一六〇	二三八	四五〇	五五〇
蘇 蘭	六一	一六八	二〇二	四三一	五六九
愛 蘭	一九五	七六	一九六	四六七	五三三

論 本 業 農

英國	佛蘭	瑞士	露西	埃太	伊太	西班牙	瑞典	諾威	丁抹	和蘭	白耳	瑞西	希臘	歐洲諸國平均	北米合衆國
七三	一七〇	一七八	二九八	二八〇	一九〇	一六〇	二二〇	一九〇	二一〇	二〇〇	一六六	一五〇	一一五	一八七	一五三
一四八	一一七	一一八	六五	八一	八〇	七〇	七〇	九〇	八五	九三	一六〇	一二五	三二	八〇	七七
二二九	一三七	一三〇	四七	六四	七七	七二	二二	八〇	七五	八〇	四六	一〇〇	五五	九〇	一七
四五〇	四二四	四二六	四一〇	四二五	三四七	三〇二	五二三	三六〇	三五〇	四一〇	三七八	三七五	二〇二	三五七	三四七
五五〇	五七六	五七四	五九〇	五七五	六五三	六九八	六八七	六四〇	六五〇	五九〇	六二二	六二五	七九八	六四三	六五三

上表に見る如く、農業者の数が其の國に隨ふて多少あるは、是れ各國の經濟の程度

論 本 業 農

が同一ならざるが故なり、一國に就ても年を追ふて進歩する國にありては、亦年々農業者の数の減少する傾向を存す、英國に見る所の如し、(第六章参照) 古來商業の開發は農民の減少を速かざりしはなく、其の減少は國家の病ならざりしはなかりし、萩生徂徠曰く、都鄙の境なき時は、農民次第に商賣に變しゆき、國貧しくなるものなり、農民變して商人となるとは、國政の上には古より大に嫌ふとなり、又曰く、武家の數と町人百姓の數とを比量して見しに、町人百姓の人數は武家の百惣倍なるべし、(徂徠政談) 太宰春臺曰く、農民漸々に減少すれば米穀乏しくなる、工商多くなれば種々の買物出生し、四方よりも聚まる、故に人の奢侈の心を引起し、金銀を重寶する風俗になりて、國用漸々に乏しくなり、上下貧乏の端となる、國家の大なる害也、是に因て聖人の政には天下の戶籍を正しくして、四民の家數人別を度々改て農民より妄に他の業に遷るとを禁するなり、(經濟錄) 甚たしきは農民の數を絶對的に制定せむと計畫したる者もありし、藤田幽谷の勸農或問に、商の數は大抵士と農との間に積り合せてよき程であるべきなりと、佐藤椿園曰く、國民を總して八民と名づけ、草民の人數は他の士民の總數より三倍なるにあらすむは叶はざる

と知るべしと、是れ即ち國民の七割五分を農民と爲すべしと云ふの議論にして近世に至ては獨逸のユリメリン氏が國民の職業の配置宜きを得むが爲めには、農戸が年々市場に販賣する農産物が他の職業者一戸數口を支持するに足るを要すと説きたるあり、前掲の統計は未だ以て完全なるものと云ふべからず、然るにエンゲル博士の手に就れる表は詳密にして疑はしきと少なければ、左に掲ぐべし表は人口百に對する職業者の割合を示せる者なり。

論 本 業 農

國名	食物	衣服	住居	薪炭油	衛生	宗教	教育	法律	娛樂
日耳曼	五、五〇	一、八七	六、八八	四、〇〇	一、五五	一、五五	二、六六	四、四四	二、四四
埃太利	〇、〇〇	三、三〇	六、〇〇	二、二〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	三、三〇	一、一〇
匈牙利	七、七〇	六、六〇	五、五〇	二、二〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	三、三〇	一、一〇
瑞 西	三、三〇	二、二〇	一、一〇	〇、〇〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	三、三〇	一、一〇
和 蘭	五、五〇	二、二〇	一、一〇	三、三〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	三、三〇	一、一〇
白耳義	一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	三、三〇	一、一〇
佛蘭西	五、五〇	一、八七	三、三〇	二、二〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	三、三〇	一、一〇
伊太利	六、六〇	一、八七	三、三〇	二、二〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	三、三〇	一、一〇
英 蘭	二、二〇	二、二〇	一、一〇	三、三〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	三、三〇	一、一〇

論 本 業 農

上表に據るに所謂文明國を通して計算すれば、食物の供給者、即ち農業者は五割六分半の割合なり、最も少きは白耳義なり、是れ該國の位地より考ふるも、製造業に恰好し且つ又商業の要地なるか故なり、英國も亦然り、反之國運進まず、文化の度低き邦國は多數の農民を有す、匈牙利、伊太利、埃太利、瑞西等が農の收入少なきにも拘らず、農民の數割合に少からざるは、其の國山峻磽确、耕耨に適せず、力を費すと多くして得る所少なきか爲なるみ、要するに農民の數は何れの國に於ても皆大多數を占む、是故に其の生産物の縱し食物にあらすと假定するも多數を以ての故に貴きを減すると能はず、何ぞ況むや人類の生命を繼ぐの食物を生産するものなるに於てあや、塵波言忠氏の歌に、民くさの身をもみしよりなり出し汗の甲の白玉ぞこれとあるもの、正に是れを言へるなり。

蘇格蘭	愛 蘭	合衆國	平 均
三、三〇	三、三〇	三、三〇	三、三〇
一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇
一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇
一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇
一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇
一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇
一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇
一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇
一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇

結論

余は農業の範圍、性質及び其の社會に於ける位置、他の學術との關係を叙して無慮數萬の言を陳べたり、一言之れを約して歸宿すれば、則ち農業の貴重なる所以の程度を詳悉したるに過ぎず、終に臨みて一言せむに、人或は以爲らく農業の貴重なる所以は天下の衣食を要するもの、上は貴人より下は厮役に至るまで、心に知て口に唱へざるはなし、之れに對して徒に數萬言を列ねて一卷の書を作る、寧ろ消化器を具へたる動物に對し、食の要を辨して、甚た勞苦するものと擇はむやと、余も亦農業の貴重なる所以は、普く天下の識る所なるを知る、夫れ唯之れを知るか故に、乃ち數萬言を費したるのみ、詎を庸て所謂知るの知らざるにあらざるを知らむや、飢の食を索むるを知るは、飛禽含靈皆然らざるはなし、知る人あり、知らざる人あるは、則ち消化器の自らなる妙用にあらむ、之れを知るものは時に、或は害ふとあるも、大禍に至らしめず、之れを知らざるものは一旦害ふとあらば、禍殆と測られざるものあらむ、唯知るものは之れを知て自ら恭く、知らざるものは之れを知らずして危きを以て安しとなす、農業の貴重なる所以に就ても、亦將た斯に異ならむや。

農業本論

農業本論

然り農業の貴重なる所以、天下皆之れを知る、而して其の然る所以の理を問ふに及むでは、口を開きて辨ずるもの、其の人窮めて僅少と爲す、若し斯の如くむば、農と他の産業と何れか軽く、何れか重きを知らむや、將た又た何れを本とし、何れを末とするを知らむや、何ぞ況むや、農の衰頹は何如に社會を病ましむるを知らむや、夫の漫に、商本主義、若くは工本主義を説くもの、孰か此の不知の病に坐せずと爲さむや、余は本篇に於て寧ろ平常の言を叙したるものなり、敢て新奇を標せむとを力めたるにあらざり、乃ち本篇を充すの材料は何れも皆農業に關せざるはなく、或は描象的に或は具體的に、或は演繹的に、或は歸納的に、種々の範圍に於て、即ち種々の方面より農業なるものを觀察したり、

余は農に厚うして商に薄うするものにあらず、農に重うして工に輕うするものにあらず、何となれば社會は農のみありて足るものにあざればなり、溝洫疏通せずむは何を以て食を作らむ、貨財鬻かすむは何を以て日用を辨せむ、食足り貨通し、巧利精しくして、民生命を聊むす、是に由て乃ち知る、農の他の業に待つもの般なると、日輪輿地も管ならざるを、米國の政治家ダーニル、ウエブスター氏曰く、農は人類の眞

個生業と謂ふべし、吾が寒に衣し、吾が飢に穀し、民生をして憂なからしむ」と、農若し有らざるは製造業を如何せむ、農若し有らざるは商業を如何せむ、農あるか故に商も亦其の財利を通ずるを得て天下の貨を聚め、農あるか故に工も亦其の巧利を作すを得て天下の民を致す、譬へは鼎の三足の如し、若し其一足を折らば鼎は公鑊を顛すべし、譬へは三矢柱の如し、相頼て以て棟梁を支ふ、唯た農は其の最も太き一矢柱たるのみ、是故にリスト氏は三産業の權衡を説き、且つ曰く、農の隆盛なるの原因を叩かば、其の最有力なる者は製造業なり」と、デヨサイア、チャイルド氏は曰く、農と工とは双生兒なるべし、蓋し共に長育し、亦共に衰死すと、豈唯た工と双生兒たるのみならずや、是故に又英國の農學の泰斗ケアド氏曰く、農のみを以て國に勢權を張るの國民なし」と、

要するに本篇の預かる所は農を主とし、他の學問藝術を客として立論するに在りて、他の學問藝術の農に及ぼす影響を論したるものにあらず、是れ蓋し農を私するものにあらずして、條理の當に然るべき所以に由れるのみ。

訂 正 農 業 本 論 終

明明明明明明
 治治治治治治
 三三三三三三
 十十十十十十
 八六四三二一一
 年年年年年年
 六^十十^十四八八
 月^一月^二月^三月^四月^五
 十三三五十五
 日日日日日日
 六五四三再發印
 版版版版版行刷

著者

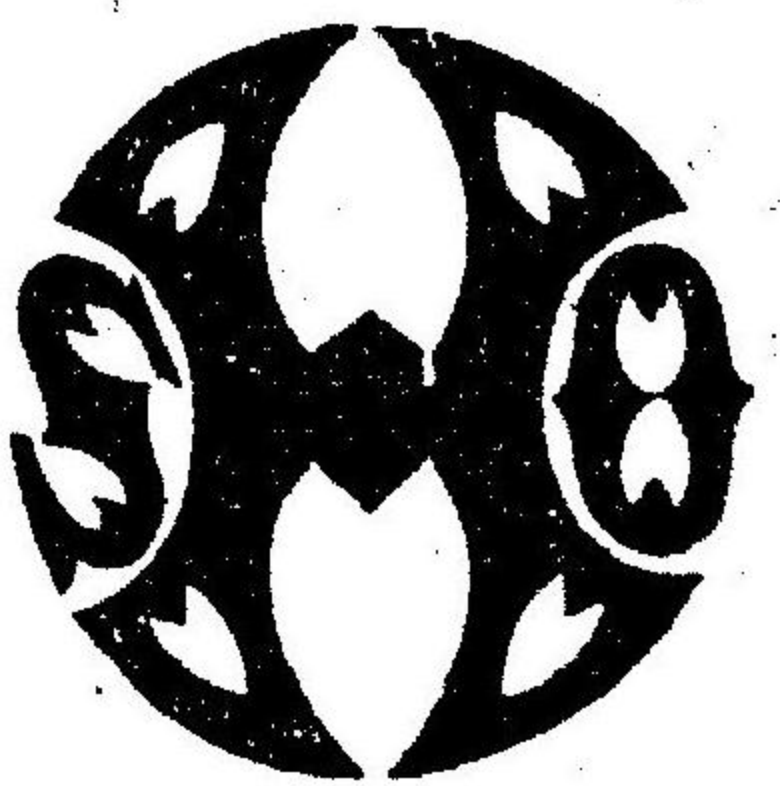
新渡戶稻造

發行者

芳野兵作

印刷者

佐久間衡治



東京市日本橋區通二丁目十八番地
 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所 東京日本橋通二丁目(電本一千一)
 特約所 大阪市東區備後町四丁目 裳華房
 特約所 尾張名古屋市本町三丁目 吉岡平助
 印刷所 東京市京橋區西紺屋町 川瀨代助
 英舍

農業本論與附

正價金壹圓五拾錢

小包郵稅金十五錢

植物學界空前之大著

植物系統學

理學士 池野成一郎先生著

植物の形態と配列し、所屬を定め、種類を區別するは、植物配列學これを略すべし。植物の系統的親縁を探索し、併せて其進化の歴史を探討するに至つては、植物系統學に俟たざる可からず。然るに従來我國に公刊せられたる植物學上の著書は、概ね植物配列學に止り、其植物系統學に關するものは、唯一の本書であるのみ、其緒言の二節に曰く。

本書は現今の最も進歩せる植物分類學を記載するを以て目的とす。故に一般の普通植物學と學習せる初學者には、往々解さ難き所あるべく、就中、細胞學に關する事項は難解ならんと雖も、最近の分類學は細胞學の恩恵に由り、其歩武を進めたること鮮なからず、故に此等の事項を全然省略することは、現今の最も進歩せる植物分類學を配列するに當りて、到底爲し難き所なり、但し初學者と雖も、書中に挿入せる圖畫により、其説く所を精讀すれば、大綱に通せんことは、敢て不可能に非らざるべしと信ず。

と以て著者の本書に對する抱負如何を見るべく、議論斬新にして秩序整然、書中に挿入せる圖畫も千二百餘種の多きに上り、精巧緻密なること殆んど其比なく、卷末に添ふる邦語索引・學名索引・英佛和對譯術語辭彙を以てせり、之を我が植物學界空前の大著として推薦するも決して誇張に非らざるを信ず。

大判特製本全壹冊
全紙數六百五十頁
正價金五圓五拾錢
小包郵稅金拾六錢

Der Mensch

人性

毎月一回

十日發行

見本冊二十冊前金七拾七錢 ●六冊前金九拾錢
二十冊前金七拾七錢 (郵券代用一割増)

主筆 富士川游

「人性」は自然科学上の知識に據りて、人類の社會的生活及び精神的生活を研究する、我邦唯一の學術雜誌なり、其主義は先づ生活の自然律を明にしたる後、進て歴史的に人類の社會的生活及び精神的生活を考究し、又實際的に人類の發育保続に必要な條件を調査し、以て人類の社會的生活及び精神的生活を向上の途に導かむ事を期す、故に生物學、人類學、心理學、醫學、衛生學より統計學、文明史、社會學、教育學、宗教學、法學、經濟學等に至るまで、苟も人性問題の研究に資すべきものは皆網羅採收せざるは無し。庶幾くは世の法律家、行政者、教育家、宗教者、醫家、心理學者、其他苟も人類の社會的生活、及び精神的な生活研究に興味を有する諸君子のために、無二の好伴侶たるを得む。

東京市日本橋區通二丁目十八番地

發售所 (電話本局) 芳野兵作

主筆 富士川游

Der Mensch

人性

十日發行

見本冊壹金七拾錢 ● 前冊六拾錢 郵券代用 九拾錢 增刊一冊

「人性」は自然科學上の知識に據りて、人類の社會的生活及び精神的生活を研究する、我邦唯一の學術雜誌なり、其主義は先づ生活の自然律を明にしたる後、進で歴史的に人類の社會的生活及び精神的生活を攻究し、又實際的に人類の發育保続に必要な條件を調査し、以て人類の社會的生活及び精神的生活を向上の途に導かむ事を期す、故に生物學、人類學、心理學、醫學、衛生學より統計學、文明史、社會學、教育學、宗教學、法學、經濟學等に至るまで、苟も人性問題の研究に資すべきものは皆網羅採收せざるは無し。庶幾くは世の法律家、行政者、教育家、宗教者、醫家、心理學者、其他苟も人類の社會的生活、及び精神的な生活研究に興味を有する諸君子のために、無二の好伴侶たるを得む。

東京市日本橋區通二丁目十八番地
豪華房 (電話本局一千一五番) 芳野兵作

明治四十一年二月印行(一)

理學士 池野成一郎先生著

植物系統學

著大之前空界學物植

植物の形態を記述し、所屬を定め、種類を甄別するは、植物記載學これを能くすべきも植物の系統的親縁を探尋し、併せて其進化の歴史を溯討するに至つては、植物系統學に俟たざる可からず、然るに従來我國に公刊せられたる植物學上の著者は、概ね植物記載學に止り、其植物系統學に關するものは、唯一の本書あるのみ、其緒言の一節に曰く。
本書は現今の最も進歩せる植物分類學を記載するを以て目的とす、故に一般の普通植物學を學習せる初學者には、往々解さ難き所あるべく、就中、細胞學に關する事項は難解ならんと雖も、軌近の分類學は細胞學の恩恵に由り、其歩武を進めたること鮮なからず、故に此等の事項を全然省略することは、現今の最も進歩せる植物分類學を記述するに當りて、到底爲し難き所なり、但し初學者と雖も、書中に挿入せる圖畫により、其説く所を精讀すれば、大綱に通せんことは、敢て不可能に非らざるべしと信ず。
と以て著者の本書に對する抱負如何を見るべく、議論斬新にして秩序整然、書中に挿入せる圖畫も千二百餘種の多きに上り、精巧緻密なること殆んど其比なく、卷末に添ふるに邦語索引・學名索引・英佛和對譯術語辭彙を以てせり、之を我が植物學界空前の大著として推薦するも決して誇張に非らざるを信ず。

大判特製木全壹冊
全紙數六百五十頁
正價金五圓五拾錢
小包郵稅金拾六錢

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 裳 ▶

農學博士法學博士 新渡戶 稻造著	札農農科大學教授 農學士高岡熊雄譯	盛岡農林學校教授 農學士伊藤清藏著	韓國興業會社技師 農學士加藤末郎著	農學士山崎延吉著	町田福堂遺著	農藝化學士 織田又太郎著	川上農學士校閣 高落松 太郎著	山崎農學士校閣 山田太一郎著	農學士原 浩次 林學士山崎 浩次 鈴木 敏夫著
農 業 本 論	農 政 學	農 業 金 融 論	韓 國 農 業 論	理 想 之 農 村	將 來 之 農 業	農 民 之 日 醒	農 村 時 論	實 驗 之 理 想 鄉	農 林 家 必 携
五版	再版	再版	初版	三版	再版	三版	初版	再版	再版
菊判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判美本 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊版美本 全壹冊	菊判美本 全壹冊	菊判美本 全壹冊	袖珍美本 全壹冊
正價金壹圓五拾錢 小包郵稅金拾貳錢	正價金壹圓八拾錢 小包郵稅金拾貳錢	正價金壹圓八拾錢 小包郵稅金拾貳錢	正價金壹圓貳拾錢 小包郵稅金拾貳錢	正價金七拾錢 小包郵稅金八錢	正價金七拾錢 小包郵稅金八錢	正價金參拾錢 小包郵稅金四錢	正價金參拾五錢 小包郵稅金六錢	正價金貳拾錢 小包郵稅金四錢	正價金七拾錢 小包郵稅金六錢

明治四十一年二月印行(二)

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 裳 ▶

札農農科大學教授 農學士明峰正夫著	農學士明峰正夫著	神戶測候所長 中川 源三郎著	島根縣農林學校校長 農學士草場榮喜著	肥料學專攻農學士 河村 九淵著	農學士角田啓司著	下總御料牧場技師 注 正 章 著	統監技師獸醫學士 原島善之助著	佐藤農學博士序 北海道畜産協會編	農藝化學專攻農學 士 石橋三郎治著
農 業 種 子 學	種 子 及 育 種	農 業 氣 象 學	實 用 土 壤 學	應 用 肥 料 學	日 本 土 地 經 濟 論	日 本 馬 耕 新 書	產 馬 大 鑑	畜 産 學 講 義	牛 乳 と 衛 生
再版	新版	三版	三版	四版	再版	新版	再版	再版	再版
菊判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判美本 全壹冊	菊判假製 全壹冊	菊判美本 全壹冊	大判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全貳冊	菊判美本 全壹冊
正價金壹圓八錢 小包郵稅金八錢	正價金壹圓貳拾錢 小包郵稅金八錢	正價金壹圓貳拾錢 小包郵稅金八錢	正價金八拾錢 小包郵稅金八錢	正價金五拾五錢 小包郵稅金八錢	正價金參拾錢 郵送料金四錢	正價金參拾錢 郵送料金四錢	正價金參圓五拾錢 小包郵稅金拾六錢	上卷正價金壹圓七拾錢 下卷正價金壹圓參拾錢 小包郵稅各金拾貳錢	正價金五拾錢 郵送料金六錢

明治四十一年二月印行(三)

◀ 告 廣 書 圖 刊 既 房 華 裳 ▶

理學博士 農學士 松村 松年 著	日本昆蟲學	十版	菊判洋裝 全壹冊	正價金壹圓七拾錢
札幌農科大學教授 松村 松年 著	日本害蟲篇	八版	菊判洋裝 全壹冊	小包郵稅金拾貳錢
マスターオブアーツ 桑名伊之吉 著	昆蟲學研究法	初版	菊判洋裝 全壹冊	小包郵稅金壹圓也
昆蟲學專攻 石田 昌人 編	昆蟲採集日記	初版	菊判洋裝 全壹冊	郵送料金貳拾錢
養蠶學專攻農學士 須田金之助 著	野生絹絲蟲論	初版	菊判洋裝 全壹冊	郵送料金九拾錢
須田農學士校閱 田村兼藏 先生著	最近養蠶論	再版	菊判洋裝 全壹冊	小包郵稅金八錢
農學士大脇正淳 著	最近米穀論	三版	菊判洋裝 全壹冊	小包郵稅金壹圓參拾錢
札幌農科大學教授 藤田 經信 著	日本水產動物學	再版	菊判洋裝 全壹冊	小包郵稅金貳拾錢
大瀧圭之介 藤田 經信 合著	日本魚類圖說	初版	全六集 附說	小包郵稅各貳圓也
藤田 經信 合著	日本魚類查定法	初版	菊判美本 全壹冊	小包郵稅金四拾錢
大瀧圭之介 著	日本魚類查定法	初版	全壹冊	小包郵稅金四錢

明治四十一年二月印行(四)

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 裳 ▶

東京農科大學教授 池野成一郎 著	植物系統學	新版	大判洋裝 全壹冊	正價金五圓五拾錢
札幌農科大學教授 遠藤吉三郎 著	實驗隱花植物學	新版	菊判洋裝 全壹冊	小包郵稅金八錢
宮部理學博士校閱 農學士 出田新著	日本植物病理學	改版	大判洋裝 全壹冊	正價全五圓五拾錢
宮部理學博士校閱 農學士 出田新著	實用植物病理學	再版	菊判洋裝 全壹冊	小包郵稅金七拾錢
札幌農科大學教授 林學士 新島善直 著	日本森林保護學	初版	菊判洋裝 全壹冊	上卷正價金壹圓八拾錢
宮部理學博士校閱 農學士 川上瀧彌 著	森林植物圖說	初版	菊判洋裝 全壹冊	小包郵稅金拾貳錢
福岡縣農學校教諭 島村 斷夫 著	實用森林數學	再版	菊判洋裝 全壹冊	上卷正價金八拾錢
札幌農科大學教授 坂岡末太郎 著	測量學講義	三版	菊判洋裝 全貳冊	前卷正價壹圓七拾錢
神戶測候所長 中川源三郎 著	天氣豫報論	再版	菊判洋裝 全壹冊	後卷正價壹圓參拾錢
ドクトルニヒヨム原著 理學士 一戶直藏 譯	星辰天文學	初版	菊判洋裝 全壹冊	小包郵稅各八錢

明治四十一年二月印行(五)

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 裳 ▶

長岡理學博士校閱 佐藤政資著	札幌農科大學教授 藤田經信著	島根縣農林學校校長 農學士草場榮喜著	南農學博士校閱 農學士清水元太郎著	玉利農學博士校閱 池本文雄著	果物雜誌主幹 池本文雄著	津田貞次郎著	後藤雷外序 前田曙山著	川邊農事試驗場長 北神貢著	織田農藝化學士校閱 藤原梅次郎著	釀造學專攻農學士 藤田昌著	農學士理學士 堀正太郎著	宮部理學博士校閱 農學士川上瀧彌著	宮部理學博士校閱 農學士山田新著	農學士赤星朝暉校閱 農學士河北一郎著	農學士赤星朝暉校閱 農學士河北一郎著	神戶測候所長 中川源三郎著	農學士菊池謙彌君 佐藤益助君合著	農學士草場榮喜著 農學士河北一郎著
無線電信	藥劑便覽	實用園藝學	蘋果圖譜	蘋果栽培書	果樹栽培書	蔬菜促成栽培書	草木栽培書	柑橘栽培書	蘭草栽培書	釀造用大麥論	農作物生理學	植物生理學	植物病理學	有機化學	無機化學	氣象學	農用物理學	實用肥料學
初版	三版	再版	初版	五版	三版	初版	再版	再版	初版	再版	五版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版
菊判洋裝 全壹冊	袖珍美本 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	全三冊 十二種	菊判美本 全壹冊	菊判美本 全壹冊	菊判美本 全壹冊	菊判美本 全壹冊	菊判美本 全壹冊	菊判美本 全壹冊	菊判假裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判美本 全壹冊	菊判美本 全壹冊
小包郵稅金九拾五錢	小包郵稅金八拾五錢	小包郵稅金七拾錢	小包郵稅金八圓也	正價金參拾錢	正價金四拾錢	正價金參拾錢	正價金四拾錢	正價金四拾錢	正價金四拾錢	正價金五拾錢	正價金五拾錢	正價金四拾錢	正價金四拾錢	正價金六拾錢	正價金五拾錢	正價金五拾錢	正價金五拾錢	正價金五拾錢

明治四十一年二月印行(六)

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 裳 ▶

農學士草場榮喜著 農學士河北一郎著	農學士赤星朝暉校閱 農學士河北一郎著	農學士赤星朝暉校閱 農學士河北一郎著	神戶測候所長 中川源三郎著	農學士菊池謙彌君 佐藤益助君合著	農學士草場榮喜著 農學士河北一郎著
實用肥料學	農用物理學	氣象學	農用物理學	實用肥料學	實用肥料學
初版	初版	初版	初版	初版	初版
菊判美本 全壹冊	菊判美本 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判洋裝 全壹冊	菊判美本 全壹冊	菊判美本 全壹冊
正價金四拾五錢	正價金四拾五錢	正價金五拾錢	正價金五拾錢	正價金五拾錢	正價金四拾五錢

◎詳細圖書目錄あり希望の方は往復端書にて申込次第進呈◎

明治四十一年二月印行(七)

農林界絶好之寶典

農學士 原澄次君 鈴木敏夫合著
林學士 山崎嘉夫君

農林家必携

新 袖珍美本全壹册
正價金七拾錢
刊 郵送料金六錢

高尚なる學理を説きて机上研究の資と爲すべき著書あれども普通平易の定説を博採して實際執務の便に供すべきものなきは現今農林家の遺憾とする所なり本書は著者が多年の實驗により汎く農作物の耕種肥培の蘊奥を探り山林の仕立果樹の栽植は勿論家畜養蠶家禽の飼育管理に至るまで簡に從ひ要を撮み之に加ふるに土壤肥料其他農林産物の鑑定法及び家畜審査の詳細を盡したれば初學者は師なくして農藝林學の門に遊ぶを得べく農事技術者實業家は以て座右に缺く可からざる唯一の好參考と爲すを得べし眞に掌中に白璧最も少にして最も完全なる農林家の寶典は之れを措て他に求む可からざるなり。

目要書本

- 第一章 作物 ○第二章 山林 ○第三章 家畜類 ○第四章 養蠶・養蜂・養魚 ○第五章 肥料 ○第六章 氣象 ○第七章 土壤 ○第八章 病虫害及有害有益鳥類 ○第九章 農林業土木 ○第十章 農産製造及林産物製造 ○第十一章 農林産物家畜審査法及諸鑑定法 (附) 作物試験調査法 ○第十二章 諸分拆表 ○第十三章 諸早見法 ○第十四章 農林に関する諸統計 (附録) ○法規要項 ○度量衡 (以上總六號活字紙數大凡六百頁)

明治四十一年二月印行(八)

ドクトル 富士川 游先生著

日本醫學史

菊判別製本全壹册
全紙數千三百餘頁
正價金四圓五拾錢
小包郵税金拾六錢

明治四十一年二月印行(一)

斯學界嚆矢之大著

醫學の歴史は、太古より今日に至るまで幾千年の間、治療の知識及び知識が如何にして發達せるかを研究するものにして、獨り醫家の之を詳かにするの必要あるのみならず、文化史を研究するものも、亦必ず之れを度外視することを得ず、然るに我國、西洋の文物を輸入し、學問一新してより茲に五十年、醫學の如きは最も進歩せりと稱するにも拘らず、未だ一部の醫學歴史を有せざるは、豈學界の一大缺典に非ずや、蓋し此種の著述は、土肥博士が本書の序に列擧せる如く、「第一史料を蒐集すること難く、第二史料の眞偽を甄別すること難く、第三古書の文字譌謄して解し易らず、第四政治及び文化の史に涉らざるべからず、第五史料を次第して編述すること難く、第六過去の事實を詳かにすると同時に今日の學術に通ぜざる可からざる等の六難あり」其世に現はれざるも亦故なきに非らざるなり、今ドクトル富士川游氏、刀圭の餘力を揮つて此難事業に當り、二萬餘卷の古書を涉獵し、十三年の歲月を積み、遂に能く本書を大成し、以て我學界の缺典を補ふ、其太古より明治時代に至る二千五百餘年に亘る醫學的知識、醫家の地位及び疾病の歴史を叙する、秩序整然として一絲亂れず、學者稱するに空前の大著述を以てせり、我國文化の由來を尋究する者、必ず本書に據れ

故勝海舟伯序 田邊蓮舟翁序
松平直亮伯序 長田偶得編纂

(上卷目下印行)

徳川三百年史

菊判別製本全三册
全體總數五千五百餘頁
上卷正價金四圓五拾錢
中卷正價金五圓五拾錢
下卷正價金四圓五拾錢
小包郵稅各卷共貳拾錢

本書所載の人物 八十餘名 第一門 徳川家康以下、時代活動の中心たる第

二門 伊達政宗、水戸光圀 第三門 藤原惺窩、中江藤樹、伊藤仁齋、本居宣長、佐

四門 以下の諸賢候を收め 第五門 には言行俊邁、當時を傾動し後 卷首 に詳細なる

表 には文學者美術工芸 家其他名僧等を收む 人の觀感に資すべき者を收む、年

を以てす、合して之を見れば精密なる徳川史なり、分ちて之を讀めば趣味多き偉人の傳記なり、
三百年間に於ける名君賢相、碩學鴻儒、義人烈士の偉觸に與感し、兼ねて政教文化の得失と思想
風尚の變遷とを詳かにし、今日文化の淵源する所を知らんと欲する者は、須らく書架の珍と爲すべし。

明治四十一年二月印行(二)

文學博士 井上哲次郎序
禪宗主幹 上村觀光編纂

(目下詩文部第三輯迄)
發行○以下逐次印行)

五山文學全集

菊版別製本全五册
正價全部金貳拾圓
小包郵稅各卷共貳拾錢

近時史學の研鑽年を逐ふて盛なるに拘らず我が南北朝より室町時代を通じては殆ど闇黒の裡に葬られ
殊に其文學に至りては之を稱説する者絶てなし蓋し當時の文學は五山僧の專擅する所にして所謂五山
文學なるものは是なり徳川氏三百年間に鬱茂せし文教は全く其淵源を茲に發す而して其典籍に至つては
從來多く傳らず彼の徳川氏の權威と塙保己一の熱誠とを以てするも群書類從に收むる所僅に數部に過
ぎず况んや本集所載の全部を得んとするが如きは數千金を投ずるも亦容易ならず上村觀光氏夙に五山の
禪刹又は名家に就て其秘籍珍本を借覽し或は之を購求し涉獵多年遂に詩文部百十種日記部二十五種總
計三百七十九冊を得て五山文學全集と名け以て其第一輯第二輯第三輯を發刊する事となれり近來全集
の出版續出するも本集の如き秘籍珍書を以て満たされたるもの絶て無し文學家宗敎家は勿論諸學校に
於て當該學科教員の參考書として一本を備ふるの必要あり且つ一般紳士の書齋には缺くべからざるの
絶好良書なりとす印刷部數に限りあれば速に購求の榮を賜へ

明治四十一年二月印行(三)

◀ 告廣書圖刊發房華裳 ▶

故勝海舟先生序 長田偶得編纂	六大醫學博士序 富士川遊著	新渡戶法學博士閱 農學士菅菊太郎著	渡邊國武先生序 上村觀光著	井上文學博士閱 上村觀光編纂	三浦千春大人遺著 吳醫學博士校訂	栗本鋤雲先生遺著 栗本秀二郎校訂	賴杏坪先生編著 富士川子長校訂	大槻文學博士校訂 作並清亮編纂	志賀重昂先生校閱 根來可敏著	德川三百年史 初版 菊判美本 全三冊 上卷四十一 中卷五十五 下卷五十五 正價金四圓五十錢	日本醫學史 初版 菊判洋裝 全壹冊 小包郵稅金拾六錢	日歐交通起源史 再版 菊判洋裝 全壹冊 小包郵稅金八錢	五山文學小史 再版 菊判洋裝 全壹冊 小包郵稅金八錢	五山文學全集 初版 菊判洋裝 全五冊 詩文部三冊發行 正價各四圓小包各廿錢	萩園遺稿 初版 菊判洋裝 全壹冊 小包郵稅金拾貳錢	菴遺稿 再版 菊判洋裝 全壹冊 小包郵稅金拾貳錢	藝藩通志 初版 大判洋裝 全四冊 小包郵稅金參拾六錢	松島勝譜 初版 菊判洋裝 全壹冊 小包郵稅金八錢	地理辭典 初版 菊判洋裝 全壹冊 小包郵稅金八錢
-------------------	------------------	----------------------	------------------	-------------------	---------------------	---------------------	--------------------	--------------------	-------------------	--	--	---	--	--	---------------------------------------	--------------------------------------	--	--------------------------------------	--------------------------------------

明治四十一年二月印行(四)

◀ 告廣書圖行發房華裳 ▶

故勝海舟先生題字 裳華房編輯部編纂	故福羽美翁題字 裳華房編輯部編纂	志賀直道先生序 二宮尊親著	二宮尊親先生序 吉田宇之助著	富田高慶翁著 二宮尊德	松方正義侯題字 吉田宇之助著	戶野知十著 併趣畫趣	東京市御編纂 東京案內再版	高楠文學博士閱 常光得然著	佛陀家庭訓 初版 菊判美本 全壹冊 郵送料金參拾錢	座右之銘 十版 菊判美本 全壹冊 郵送料金參拾錢	續座右之銘 三版 菊判美本 全壹冊 郵送料金參拾錢	報德分度論 三版 菊判美本 全壹冊 郵送料金貳拾錢	報德要論 再版 菊判美本 全壹冊 郵送料金貳拾錢	民記 再版 菊判美本 全壹冊 郵送料金參拾錢	東京市全圖 初版 菊判美本 全壹冊 郵送料金五拾錢也
----------------------	---------------------	------------------	-------------------	----------------	-------------------	---------------	------------------	------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	------------------------------------	--

明治四十一年二月印行(五)

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 裳 ▶

石龍子先生著 **形貌學講義** 初版 菊判美本 正價金七拾錢
 播磨龍子先生著 **性相學精義** 初版 菊判洋裝 小包郵稅金八錢
 大澤醫學博士校閱 **人體內臟圖** 初版 美裝掛圖 小包郵稅金拾貳錢
 富士川 游撰 **人體內臟圖** 初版 菊判洋裝 小包郵稅金八錢
 マスターオブアーツ 清著 **文日本近世政治史** 初版 全壹冊 正價金八拾錢
 ハプアリントン原著 英文 **貧兒之機會** 初版 全壹冊 小包郵稅金八錢
 在米 野口健吉譯 **英文武士道** 改版 全壹冊 小包郵稅金八錢
 農學博士法學博士 **英文武士道** 改版 全壹冊 小包郵稅金八錢
 新渡 戸稻造著 **英文武士道** 改版 全壹冊 小包郵稅金八錢
 農學士川上瀧彌著 **增訂「はな」** 四版 特製美裝 小包郵稅金八錢
 農學士森 廣著 **增訂「はな」** 四版 全壹冊 小包郵稅金八錢
 柚木玉郎著 **薔薇の栽培** 初版 全壹冊 小包郵稅金四錢
 和田英作著 **薔薇の栽培** 初版 全壹冊 小包郵稅金四錢
 宮崎三味著 **小鳥と金魚** 初版 全壹冊 小包郵稅金四錢
 安藤紫陽著 **小鳥と金魚** 初版 全壹冊 小包郵稅金四錢

◎詳細圖書目錄あり希望の方は往復端書にて申込次第送呈◎

明治四十一年二月印行(六)

明治四十一年二月印行(七)

行 刊 期 定

東京理科大學植物學會編輯

植物學雜誌 (毎月一回)

正價一冊金貳拾錢郵稅一錢
 一年前金貳圓四拾錢郵稅不要

東京理科大學動物學編輯

動物學雜誌 (毎月一回)

正價一冊金貳拾錢郵稅一錢
 一年前金貳圓四拾錢郵稅不要

日本園藝會編輯

日本園藝會雜誌 (毎月一回)

正價一冊金貳拾錢郵稅一錢
 一年前金貳圓四拾錢郵稅不要

發賣所 東京日本橋 (一〇七番)

裳 華 房

東北大學札幌農科大學編輯

札幌農學校紀要 (毎年一回)

正價二卷一號ヨリ三號迄金五拾錢
 第四號金壹圓郵稅各四錢

札幌農科大學博物學會編輯

札幌博物學會報 (毎年一回)

正價全一卷一號壹圓貳拾錢
 二號金五拾錢郵稅各四錢

東京理科大學動物學會編輯

日本動物學彙報 (毎年一回)

正價各金五拾錢郵稅四錢
 四冊前金貳圓郵稅不要

行 刊 期 定 不

Der Mensch

性 人

(一月) 郵冊壹冊 郵金前冊二十 (廿行日) 錢十九金前冊六●錢六十共稅郵冊壹 (增制一用代券郵) 錢拾七圓壹金前冊二十

△第一卷合特製 正價金二圓也 小包料拾六錢

△第二卷合特製 正價金二圓也 小包料拾六錢

△第三卷合特製 正價金二圓也 小包料拾六錢

▲見本郵券拾錢

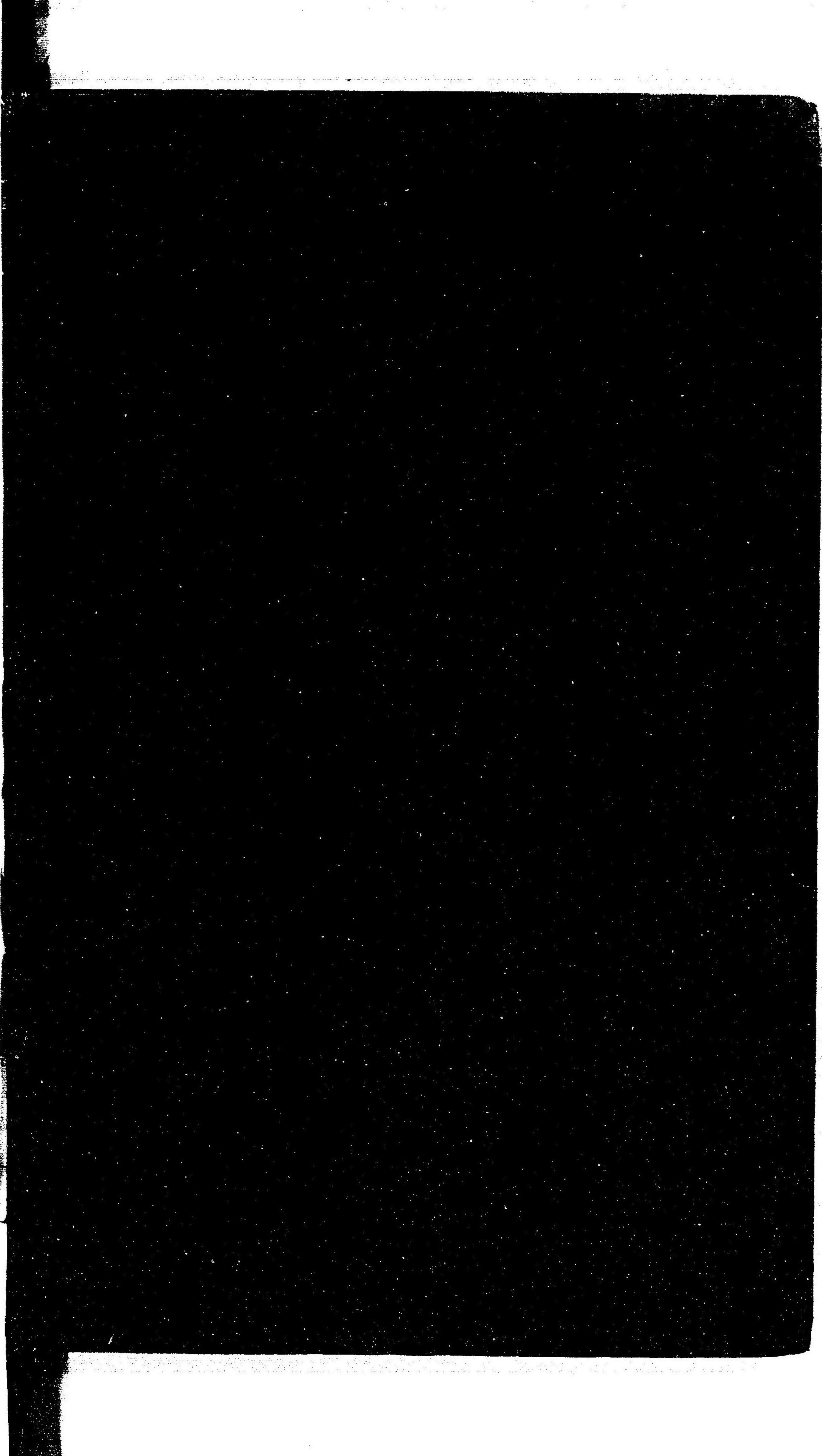
「人性」は自然科学上の知識に據りて、人類の社會的生活及び精神的生活を研究する、我邦唯一の學術雜誌なり、其主義は先づ生活の自然律を明にしたる後、進で歴史的に人類の社會的生活及び精神的生活を攻究し、又實際的に人類の發育保続に必要な條件を調査し、以て人類の社會的生活及び精神的生活を向上の途に導かむ事を期す、故に生物學、人類學、心理學、醫學、衛生學より統計學、文明史、社會學、教育學、宗教學、法學、經濟學等に至るまで、苟も人性問題の研究に資すべきものは皆網羅採收せざるは無し。庶幾くは世の法律家、行政者、教育家、宗教者、醫家、心理學者、其他苟も人類の社會的生活及び精神的な生活研究に興味を有する諸君子のために無二の好伴侶たるを得む。(明治三十八年四月創刊)

△主筆 ドクトル 富士川 游 △編輯主任 石橋 臥波

發行所 東京日本橋 裳華房

明治四十一年二月印行(八)

昭和七年五月十三日
小牧實繁



062501-000-4

610.1-N862n

農業本論 (6版)

新渡戸 稻造/著

M38

CCA-1419



